

操 評判記 総覧

昭和三十三年六月

大阪中央放送局音楽課作成

凡 例

- 一、この索引はNHKの義太夫放送の資料として作成したものである。
- 一、使用した評判記は、主として祐田善雄氏所蔵の筆写本によった。しかし、読み違い等によって生じた誤謬が少からず見られるから、取扱いは注意が必要である。
- 一、検索項目欄は太夫・三味線弾・人形遣の三部に区分した。そして、姓は（ ）内に収め、名を五十音順に整理した。
- 一、内容記事は次のように区分した。

才一段

評判記の番号（発行年月の西暦年と下三桁で表す事）を原則としたが、二冊以上発行されている年は月と

明記して区分した。

番号	書名	刊行年月	人数			芸評	
			計	大夫	三味線人形		
七二七	今昔標年代記	一七二七年(享保十三) 孟春	一九	一九		有	
七四六	儀口齋	一七四六年(延享三) 三月	七九	三七	九	鳥	有
七四三	浪花其末葉	一七四七年(延享四) 二月	四六	二四	九	扇子、筆	有
七四三	標曲浪花芦	一七四七年(延享四) 三月	八六	二五	一三		有
七四〇	波のうねり鼎尊	一七四七年(延享四) 末ウ(ウ)	六一	三〇	一四		×
七五六	竹豊故事	一七五六年(宝暦六) 九月	八五	二五	一四	古今之序	×
七五七	標西東見台	一七五七年(宝暦七) 仲夏	四三	二五	一八	名所	有
七五八	女大名東西評林	一七五八年(宝暦八) 二月	五四	二一	一二	能外題	有
七五九	刺冠雜誌	一七五九年(宝暦九) 七月	六	六	二一		有

才二段 …… その人物の展している座名
才三段 …… 格付
才四段 …… 見立などによる評言
才五段 …… 細評のまとめ並に人名の相違
なれ「近世邦楽年表」によったものは「邦」。「浄瑠璃大系図」は「系」と略記し、別に「内」を注記とした。
一、「評判難有矣」に記された東次座、新大夫座は、便宜上、前者を肥前座、後者と外記座と改めて記入した。
一、使用した評判記の種類、並にその内容は次頁の通りである。

七六一	竹の音	一七六一一年(宝曆十二)初秋	一〇三	五八	四五	箱桶橋 名物所	x
七六二	新評判蛙声	一七六二年(宝曆十二)正月	九四	五八	三六	食物	x
七六三	評判花相撲	一七六三年(宝曆十三)初秋	九八	五七	四一	草花	x
七六四	評判角茅芦	一七六四年(宝曆十四)三月	一一二	六七	四五	玉竹	x
七六五	評判登別合 題名不明	一七六五年(明和二)三月	一〇五	六三	四二	米	x
七六六	評判三極志	一七六六年(明和三)梅見月	九六	六三	三三	古戔	x
七七七	難有笑	一七七七年(安永六)三月	一八	一八		百人一首	有
七八三	評判寫宿梅	一七八一年(安永十)彌生					有
七八九	闇の磔	一七八一年(天明元)九月	九九	三九	二五	珠外題	有
七八二	江戸版 浄瑠璃秘傳抄	一七八二年(天明二)正月	二	二			有
八〇六	音曲高石集	一八〇六年(文化三)	七九	五二	一三		有

浅太夫 (北本)

七六四	北本	上上士	しきりになりわたるあられの玉
-----	----	-----	----------------

浅太夫 (竹本)

七六一	上佐	上上	世間の人が取々ほめる永久橋
-----	----	----	---------------

浅太夫 (豊竹)

七六五	上	上	目出度ゆんせい住吉米
七八三	外記	上	

浅太夫 (豊竹)

七八九	上		
-----	---	--	--

阿曾太夫 (豊竹)

七六一	江戸	上上	初らかくしなよくきこゆる柳橋
一七五四年(宝曆四)十二月江戸へ下ル(邦)			

阿波太夫 (竹本)

七六六	江戸	上	段々出せ有べし宣初けんほう
-----	----	---	---------------

家太夫 (竹本)

一七五四	斗(室曆四)	十月	出座(邦系)
七五六	竹本	上上士	対揚
七六一	京都	上上士	何れも面白く相王寺の納豆
七六二	・	上上士	そまつに人の思はぬ蓮の花
七六三	・	上上士	うまい事に仕上る菓子の子
七六四	・	上上士	さどりの名人至大通室
七六六	・	上上士	

一七六七(明和四)以降ニセ竹本錦太夫ニナル(系)

家太夫 (竹本)

七六一	外記	上	ト	手づよい道具多、弁慶橋
七六二	江戸	上	ト	すきくらいの有つてうまい餃汁
七六三	・	上	ト	よらすわらす <small>(シ)</small> の花
七六四	土佐	上	ト	段々出せ有べし宣初けんほう
七六六	江戸	上	ト	
七八二	・	上	ト	

天明元年十二月廿日より葺屋町
 操屋芝居を普請して、土佐ヲ撥碯
 正勝座元家太夫の庵看板を出す
 同二年二月上旬初日

伊織太夫 (豊竹)

七二七	豊竹		
道頓堀の料理屋、よしのお喜右エ門、 声よく、ふし事、道行のツレよし、 山平京四郎と同じ			

伊加太夫 (豊竹)

七四六	辰松	上	評判は海共川共付ぬ沖のらどり
-----	----	---	----------------

伊久太夫 (竹本)

七六二	江戸	上上	そへに簾を付て舌を団扇なわむ
七六三	〃	〃	とびこほりなくとをるかいどうのサ化
七六四	上佐	〃	手明て若やぐあら玉
七六五	江戸	〃	うきやかなる声は小諸米
七七七	外記	上上古	道念坊は此人にきつところりにけりな
竹伊勢カ舞衆門人			

生駒太夫 (竹本)

一七六三年(宝暦十三)四月出座(一印)			
七六三		上上	仙人もつうを得たりや冬瓜のサ化
七六四	京都	〃	やわらぎて心よいぶよ玉
七六五	四条南		歌舞伎出勤
七六六	江戸	上上	よく見取ほへてみる洪武通宝
〔扇谷生駒太夫〕			

伊佐太夫 (豊竹)

七六一	肥前	上上	功有な語りぶしはしほらしい親仁橋
七六二	江戸	上上	はっそりとさよりの姿は柳の糸むすむ
七六三	〃	上上	口中さくくとしら梨子の花
七六四	肥前	〃	やさしく岡へる女中の文玉

伊関太夫 (竹本)

七六三	江戸	上	世にはびこりて目出度稲の花
七六四	土佐	〃	

伊勢太夫 (豊竹)

一七四九	年 (延享二)	十一月初出座 (一邦)	
七四七二	豊竹	上上	やがて難波の指折に一ツか ニツ三ツ扇子
七四七三	〃	上上	此人の声を富の礼といふ心は ニより一がよいといふ
七四七〇	〃	上上	声はあすか川とはせがせになた 節は四はこしなせもらうとわらぬ
七五八	(コノ間)	曲一竹新太夫 参照)	
七六一	江戸	上上	貴せんともひいみのつる永代橋

十四年前丑の冬より東の座出勤
五年間大段を勤め、巳年(一七四九)冬
より江戸の豊竹座へ
病気のたぬ帰阪し新太夫と改名
成(一七五四)の冬より帰り新座へ
去る冬より旧名に立帰る(一邦)
ニハ一七五七年十二月改名)

(竹本伊勢太夫) 座元

七六二	、	、	突当てた舞も御名の御為なり	〔竹本伊勢大夫〕座元
七六三	、	、	未の賑かなもの孔雀の尾花	〔竹本伊勢大夫〕座元
七六四	、	、	しめせを悦ばすくい玉	〔竹本伊勢大夫〕座元
七六五	、	上上吉	一しよりさつゝを取つた河米	〔竹本伊勢大夫〕 左内町の清左エ門で 三代目伊勢大夫 ひねくる様で向にくい

伊勢大夫 (竹本)

七六七	肥前	上上吉	山岡のどけは山ふろしはけしいいたり口
-----	----	-----	--------------------

伊勢大夫 (豊竹) 七六六 由豆竹

七八一三	外記	上上吉	代物は小さけれどめさくとしめ休たふまふ節
------	----	-----	----------------------

磯大夫 (竹本)

一七六三	一七六三年 (宝暦十三) 四月初出座 (一印)	上上	じんじやうなけしき如子の花
七六三		上上	

磯大夫 (豊竹)

七八一九	上上吉	御出せとへらやくと松浦登	南の、天神記、好評、のら退座 此頃はいなり出勤で「橋供養」 結構な声
------	-----	--------------	--

伊太夫 (竹本)

七四六	辰松	上上吉	いつでもあたりはひごい まつぼう鳥	浄瑠璃のこし、標の工合、程如子に拍子声 あつて違者なり しかし声亦にうつらざる所有って嫌味あり その上野早なり、従って位有る事おもはし
-----	----	-----	----------------------	--

八〇六				東の座、伊藤伝記より出勤 肥前掾新芝居興行の時江戸に下り 「小宗」三段目大当り 三庄大夫、四、切、山姥、出語り、山崎 与次兵へ「中」巻好評 「たなれど末世に残りたる戯題しれず
-----	--	--	--	--

伊 太 夫 (竹本)

七六五	江戸	上	出	座本	声かゝる様にとひいふを松代米
-----	----	---	---	----	----------------

市 之 丞 (西東)

七六五	江戸	不	出	座本	
-----	----	---	---	----	--

伊 豆 大 夫 (竹本)

七四六	休	上	上	出	此年だけどもおもしろふ くむるほじろ
七四七・二	陸 竹				音曲の行儀くづれぬ 中啓扇子
七四七・三		上	上	古	此人の浄まり、上手の持巻 といふ、心は、つめかよいと いふ、
七四八・〇		上	上	音	声は、さらさらのすりこ木、とは、さらねはよいが 節は、文弥女郎、なぜ、京りにくる物でもなし

めし忠とて名高し、西風の人
先年辰松へ下り、廿四草、にて阿波大夫が即
大当り、愛護若、河内通、後三年、十三
鐘、等、古風にて堅し
去々年、辰松座で、五盾全
〔陸竹伊豆大夫〕
めしや考兵工といふ
中音にて声柄、よく、ふし細かにして道行
景事によい、が、声に場が不足
古風で、浄氣なる浄瑠璃、違者で、ウレイ
修羅にも美を入れて突込んで語る
〔陸竹伊豆大夫〕
ふし付よく語り口よとなし
中村高十郎と同じ
〔陸竹伊豆大夫〕

伊豆大夫 (豊竹)

一七五四年 (宝暦四) 十二月出座 (印・系)	七五六 豊竹	功術	「前九年」の評あり
	七五七	上上齒	「松の色は愛らぬ住吉」
	七五八	中品ノ上	「前九年」の評あり
	七六一 外記	上上土	「五年前の戌の冬初出勤」
	七六四	上上齒	「北本伊豆大夫」
	七六六 豊竹	上上土	

井筒大夫 (豊竹)

七四六 若松	上上	人のまねをよくなする、あひむ	語り出しは火縄くさい 器用はた政物真似と能くするが 非力故に、よはく立消えがする 「夏祭」住吉の致好評なれど、語り 違いを申される
七六一 外記	上上齒	いつでも見物の声でくずれる橋	

和泉大夫 (豊竹)

一七八年 (享保三) 竹本沢大夫トシテ出座	一七二一年 (同六) 竹本和泉大夫	一七二五年 (同十) 豊竹和泉大夫 (印)
七二七 豊竹		
七五九		
八〇六		
一七三二年 (享保十七) 冬退座、翌年竹本和泉大夫	一七三八年 (元文三) 没 (印)	

紙屋利右三門と云ふ
 西の屋から東へ移り豊竹沢大夫となり、更に和泉大夫
 器用なれど、ハリナシ
 ふし事の名人、節事と関く人は淋し、腹へ米ちと得るが如し
 前名沢大夫、越前赤子にて竹本座と勤め、西屋の四ノ切語り
 名人、萬の葉、赤松、祈り、御所松、四、磯馴松、四、時鐘
 記、四、大佛殿、四、長柄人柱、四、よき語り

伊津美太夫 (竹本)

七六二	江戸	上	舟路を追風てまづるは早く車切
-----	----	---	----------------

出雲太夫 (豊竹)

七六一	肥前	上上音	肉くまぶに思はるゝ石橋
七六二	江戸	上上音	身所多い平目諸見物をつみ入
七六三	、	、	まへま大さにはやりしもの菊の花
七六四	肥前	、	いっ岡ても心のゆらく玉
七六五	江戸	、	しっかりと口中が嘉黍通宝

今太夫 (竹本)

七三七	辰松		江戸の人、素人にしては器用
-----	----	--	---------------

今太夫 (竹本)

七六一	土佐		豊竹本と一所にならぶ扇橋
七六四	北本	上々	名所の川に六つの玉
			北本今太夫

伊與太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上	
------	----	---	--

伊豫太夫 (竹本)

七六六		上	岡てめでたし富寿神ほう
-----	--	---	-------------

植太夫 (豊竹)

七六六	豊竹		
-----	----	--	--

氏太夫 (豊竹)

七七七	上上吉	イヨウら山と人はいふなり	天満屋清五といふ 近年の振出し物にて、声柄は器用にて評判 よけれど、声が低く小札場へ通らぬ 中に「蔵」九段目、サ刈萱、山の段、大当り、 初下りの「八全」甜屋の段は大出来 「女護島」二段目は大入り 当春「むかし唄」セツ月評あり
七八一三	眞上上吉	声のしこみもよく當り違 はぬ内替町のこく印	
七八一九	上上吉		

采女太夫 (豊竹)

七四七二	上上吉	よいくと声諸共うま 立るかざしの扇子	声柄よく賤しからず 河内太夫の風義を移して一風面白く、殊 の外はねらる事もなし
七四七三	上上士	此人をかんのつへといふ 心は、オ一ふしがこまかい 声はほりしの殺生、 とは、そろく引ます 節は江戸のひらい なせ、すみくにねんかいる	前名考太夫 景争、道行は美しいが、修羅、せりふ 段切のみとみうすし 芳次崎之助と同じ
七四七〇	上上吉		

馬太夫 (扇谷)

七六五	四条南	歌舞伎出勤	
-----	-----	-------	--

梅太夫 (豊竹)

七六四	肥前	上	のびやかに見渡す様也、唐州米
七六五	江戸	、	

枝太夫 (豊竹)

七八一三	外記	上	
------	----	---	--

越後太夫 (竹本)

七六一	土佐	上上	若々と老りとます全杉橋
-----	----	----	-------------

越前方掾 (豊竹) 藤原重泰

豊竹上野方掾 一七三一年(享保十六)九月再受領(一邦)

七四〇			
七六三		惣巻軸 号類	
七六五			
八〇六			

声はこけしくず、こはほ
内通にやつた
節はあうかうせん、なせ
雪の段切であつた
世界のまれ者うとくげの化

座本

一七六四年(明和元)九月十三日、八十四才で没
法名、一音院直覚隆信日重居士

前名、竹本采女、豊竹若太夫
一六九九年(元禄十三)三月十一日始て櫓を揚ぐ
一七四五年(延享二)五月、一世一代の後隠居
一七六四年(宝暦十四)九月十三日、八十四才で没

評判よりもの「子日遊」、「三代記」、「二腹帯中」
「犬俣殿」、「長柄人柱」、「那須手巾」、「後藤」
「刈萱」、「和田合敷」、「条仙人」の三ノ切
「二ノ巴」中、野中隠井、長吉殺、時頼記

江太夫 (竹本)

七六一	土佐	上	正
-----	----	---	---

上手に成べし風の筋違橋

岡太夫 (竹本)

七五七	京都	借束上上吉	評判は日まより高うなる都の不二と してはやす比叡山	「夏祭」の評あり
七六一	肥前	上上吉	当世の氣に叶ふ江戸橋	「豊竹岡太夫」
七六二	江戸	〃	本計のはた向はされいに立つ切目	
七六三	〃	〃	岡人かんちへ心と百合の花	
七六四	京都	〃	ふれいなと諸人の言ふはこはく玉	
七六五	堀江 市の側	〃	因てやさしく思ひあう米	
七六六			大入にてはんじやうさせる大泉どじう	
八〇六				

三津にて評判よし
評判よりもの「蘭名持」四ノ切
「袖のいみ」宗玄庵主、由良港
「鷗」箱川屋、植生村

奥太夫 (竹本)

七四六	七太夫	上品	声がなみても御功者と同ては さくいなびき	非力なり 「夏祭」の評あり 近年古播磨の直門弟になる
-----	-----	----	-------------------------	----------------------------------

男徳齋 (竹本)

		(竹本咲太夫カラカ)		
		七八一九	上上品	ちやう場は急度奇ります大口渡
		上上品	チヤリの大將 ふし付けはいつもむじい 故政太夫の儀が残る 「上茶」座席(安永九、九、竹本)時代織 四ノ切(同十二、竹本)の評あり	

音太夫 (竹本)

一七五九年(宝暦九)九月初出座(邦)				
七六一	京都	上品	なぐてもつかへぬもの録り相 たへず声の有もの田にし是は水 のめあへ	大津屋和介とて去秋より休座 古風に正しく、声は古今未曾有 素直な風義で座敷浄まりに向くが 舞台では場へおらぬ 文評を熟ると好評 肥前座の「むかし唄」に役割はあれど 二月十二日段、本空院祇音日登信士 浅草十老龍寺に墓 いやしからぬ語り風 宝暦十四年正月、名香咒「三ノ切」同年七月 鶴山し好評
七六二	京都	上品	出せのほやい事日まほりのサ化	
七六三	上佐	上品	上手のひまに因へるころま	
七六四	上佐	上品	小取まほしによく響く種子鳴米	
七六五	京都	上品	ついでの大はね天幕通空	
七六七	肥前	上品	門日の稲景ふとなしい芸風	
七八一三				

音太夫 (竹本)

七八一九	上上音	
------	-----	--

折太夫 (竹本)

一七五三年(宝暦三)十月初出座(一邦)		
七五六	竹本	新場
七六二	江戸	さうな間にいなちほらよつとさし又
七六三	上上土	誰もうれしがる金銀花
七六四	土佐	当るとぶがめく園の玉
七六五	江戸	ひい子の連中より花を新庄米
七七七	肥前	場の見物は別して此人を松帆のうららの
七八一三	上上	いつてもよくらやうで売れます田原町の 弘慶子
		浴祿長兵エとてチヤリ場よし 時々歌舞伎座へ出勤

加賀太夫 (豊竹)

一七六〇年(宝暦十)十二月初出座(一邦)		
七六一	上上	とくと聞てうれしかる文ッ相
七六二	上上	なんても同じ合規かたからぞつとへうし立汁
七六三	上上音	しほらしいはちが見ても卯の花
七六四	上上音	それいにすき通る目鏡の玉
七六五	豊竹	

本太夫 (竹本)

七八一九	上上音	いつぞやから御女と見せぬ隠井戸
		北新地、紙治(安永七、四)限りで退座 それより福荷へ出勤 近頃は頼と見ぬ

和太夫 (竹本)

七六二	江戸	上上	すきさらいの有ってうまい飯汁
七六四	土佐	上上	

和太夫 (豊竹)

七八一三	外記	上	
------	----	---	--

上総太夫 (豊竹)

(竹本紋太夫カラ)			
七四七二	豊竹	上上	音
七四七三		上上	音
七四七〇		上上	音
一七四九年	(寛延ニ)冬段(一邦)		

此の度設太夫から改名して豊竹座へ出勤
しつかりとして人々の受けよく、実を入れて
語る

京より下り、竹本座出勤の時は改太夫
声化やか

三重郡に見立てるは、せりふ、声色さつぱ
りとしてよし

いふ、心は、オニがほるは、さ
此人の声をよくなさるからと

銀扇子

声はさかつかから茶碗とはめきくくとあがった
節はよい衆くらゐなせすこし水くさい

勝太夫 (豊竹)

七六四		上	
-----	--	---	--

要太夫 (竹本)

七四六	若松	上上	音
八〇六			

めづらしきに見物がむね入る鳥

てんま佐せ太夫、当年要太夫となる
上下ともに不自由な声なれども、よく
くろめいて語る

夏祭、道具屋の段好評

なまねと未せに残りたる戯題しれず

要太夫 (豊竹)

七八一九		上	
------	--	---	--

鐘太夫 (豊竹)

一七四七年	(延享四) 三月出座 (一邦)		
七四七二		上	
七四七三		上上	音

此人と年の明女郎といふ、心はは
て所へ引

釣鐘所出身の故、鐘太夫という
硯屋高亮
村山平九郎と同じ

七四七〇		上	声は箱根うぐいすとはかいいらし いかにまる 節は在所出のまらなき。な。せこはし やはらし 至要表珍
七五六	豊竹	上	何時迄もとめ置いて芝居の中に 死体さらしな
七五七		上	よし／＼との評判は四方に同ゆる 三井寺の鐘
七五八		上	うまみ有て誰にもまけぬ箱 入相のかねにどつといふ婿のさくら復
七六一		上	いづくでも知る其名は広嶋米 座元のたかくとあどぐ仏法そうほう
七六二		上	金銭のことくはやが玉 いづくでも知る其名は広嶋米
七六三		上	いづくでも知る其名は広嶋米
七六四		上	いづくでも知る其名は広嶋米
七六五		上	いづくでも知る其名は広嶋米
七六六		上	いづくでも知る其名は広嶋米

「一谷」序切大出来
「前九年」の評あり
十二年前の卯年、一谷将軍から出座
織クなれど、声柄きれいで、難癖なし
「清和源氏」ニノ話、「信長記」好評

八〇六			大音にて後に大立者と成る 評判よきもの「一谷」序切、「信仰記」テ切 「廿四孝」狐火、「忠臣講釈」七、「出世太平記」 九、「近江源氏」八
-----	--	--	--

兼太夫 (豊竹)

七六一	外記	上	豊竹本と一所にならぶ扇橋
-----	----	---	--------------

兼太夫 (竹本)

七六二	京都		
-----	----	--	--

狩野太夫 (竹本)

七六一	外記	上	豊竹本と一所にならぶ扇橋
七六六	坂江 市の側	上	もん句よくかちりわける明道かんほう

歌門 (豊竹)

七八一三	(豊竹新太夫ニツヅク)	一七六三年(宝暦十三年)春、十六才の時、肥前産初節目見得、源平忠合戦を岡村孫吉で勤む
------	-------------	--

河内太夫 (豊竹)

八〇六	(豊竹品太夫ヨリ)	前名品太夫、和泉に芳らぬ名人にて、四ノ切語「邦領与市」四切、「後藤」四切、「和田合戦」四切、「別萱狐川」四切、「釜ヶ刺」四切、「田村丸」四切、「五ノ合」一冊屋
一七四一年(寛保元)七月、豊竹駿河太夫ニナリ、翌年退座、間もなく没(邦)		

河内太夫 (竹本)

七四六	若松 上 品	つねりくこへれ言のぬとくは口がねほいもら鳥	前名和歌太夫、次々町河岸の「別萱」三ノ中好評、その後休座、此度河内太夫として出座、「夏祭」道行やがて駿河太夫なるなり
(竹本駿河太夫ニツヅクカ)			

甚太夫 (竹本)

七二七			嶋の内置屋町の商人、歌舞伎にも出勤、辰松屋に下り立者、修羅詣節事世話事大てい難する事なし、市村竹之丞と対比
-----	--	--	---

菊太夫 (豊竹)

七六五	江戸 上 品	メくろりよく帯のごとし常陸米
-----	--------	----------------

喜久太夫 (豊竹)

七八三	外記	上	
-----	----	---	--

記志太夫 (豊竹)

七六五		上	鳴戸の難所をこした阿波米
七六六		上	しづかみ争いよい太平通宝
			(竹本 記志太夫)

喜志太夫 (豊竹)

七八三	肥前	上	
-----	----	---	--

木曾太夫 (竹本)

七六一	土佐	上	豊竹本と一所にあらぶ扇橋
七六二	江戸		舟路を追風てまづろは早く車切
			(豊竹木曾太夫)

喜太夫 (竹本)

七二七			木津難波の生れ 五段目の役付
-----	--	--	-------------------

喜太夫 (竹本)

一七六	一斗 (宝刀十一)	十一月初出座 (一邦)	
七六二		上	年越りに物にさるほう一所に託して有様
七六三		上	上呂にしてまゆつくり花

絹太夫 (竹本)

七六三	京都	上	色に取合のよういどり花
七六四	土佐		出せにはらき出すそろばんの玉
七六五	京都		段々と諸方の取かたが吉田米
七六六			次第に評判よろし景祐けんほう

絹太夫 (豊竹)

七四六	辰松	上	当地の声頭なれどまご口ばしといろないんこ
-----	----	---	----------------------

絹太夫 (豊竹)

七八三	外記	上上	
-----	----	----	--

君太夫 (竹本)

七六一	京都	上上	次方に能なつて北野のあわ餅	(竹本 喜美太夫)
七六二	〃	〃		(竹本 喜美太夫)
七六四	〃	上上	ちしなみにして置葉玉	
七六五	〃	〃	わさくと茂ります山米	
七六六	〃	上上	此度の役義和てがら大義通室	

喜美太夫 (豊竹)

七四六	休	上上	うゑへくるりと能かへる山から	肥前の「鎌倉大景因」大有り、 その後「五ッ鷹」翌年辰松を再び 「大景因」 初日より数日同声が出かわるのがキス
-----	---	----	----------------	---

喜美太夫 (扇谷)

七六五	四条南		歌舞伎出勤	
-----	-----	--	-------	--

喜美太夫 (竹本)

七六六	江戸	上	段々出せ有べし宣和けんほう	
-----	----	---	---------------	--

喜世太夫 (竹本)

七二七				はりまや四郎兵衛という 声よく修羅つめの類、厳しく段切よし 道頭座で樽と上けるがはかくしからず、半は 仕舞ひ、その後曾根崎で座元とするが、これも
-----	--	--	--	---

立消之
それより豊竹座に年々重なり、午の年休み
その暮より勤める
文句消える様なるは玉に疵
音羽次郎三郎に同じ

喜代太夫 (竹本)

七四六	休	上上	上るりのつまりく／＼がらと 長々数尾の山鳥	親の名を迷ぐ 若手の稽古座にて名取り 声美うて能くこなす
-----	---	----	--------------------------	------------------------------------

喜代太夫 (竹本)

七六一	京都	上品齋	初舞台の評判で本ノ字若茶	〔北本 喜代太夫〕 アツなれど未せに残りたる戯題しれず
七六二	北本	上上白	びつくりする程光る小金の玉	
七六四	江戸	〃	手つよく出来ておほふ豊岡米	
七六五				
八〇六				

喜代太夫 (豊竹)

一七六〇年 (宝丁十) 十二月初出座 (一邦)				
七六一		上中	ひいきに思ふほうそでない本立相	
七六二		上上	かさあつむれば貝の柱より酔のもの	
七六三		〃	丈夫ても見はへのなきびわの甘化	
七六四		上上	いきぬはにらむやうな目玉	
七六五		〃	すき間とよく通す伊予米	

喜代太夫 (豊竹)

七六六	江戸	上上	あたらしい郷名に用元通宝
-----	----	----	--------------

喜代太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上	
------	----	---	--

桐太夫 (豊竹)

七四六	辰松	上上	駒太をよこにくわへ結ぶ いすかの鳥	去年辰松へ下る 駒太夫うつしとて受けよし 下声にてしつほりめいて語る 此度、石橋山、ニノ中、三ノ口
-----	----	----	----------------------	--

桐太夫 (陸竹)

七四七二	陸竹	上上	お声のはっきりはあましいらん扇子	当地始めて 此太夫門弟 「女舞」ニツ目はっきりしてよし 幕府元 坂東豊三に似て素直
七四七三	〃	上上	此人の声水晶の玉といふ心は、サても うつくしい	
七四七〇	〃	〃	声は金どうろりの紐、とはもとはうきから 出た 節は虫籠竹、なせ座敷での内匠	
七五六	竹本		寛潤	「竹本桐太夫」
七五七	京都	上上	突々んどの語り打もとよりお声は どっこいも円なる大佛	「竹本桐太夫」 夏祭りの評あり

吟太夫 (豊竹)

七四六	辰松	上	一ちいお生れ付くらよはくむわく馬	非力
-----	----	---	------------------	----

銀太夫 (竹本)

七六五	江戸	上上	声かゝる様にとひいきと松伏米	
-----	----	----	----------------	--

久我太夫 (豊竹)

七四六	休	上上	ちいさけれど面白く尻が むごくするせうれい	肥前様、未だ新太夫たりし時、吹矢町河岸で 興行の時出勤、猿丸太夫、初ノ切 その後、外記座で、赤方里、ニノ口、行平、 三ノ中、好評 後杯座にて稽古屋 小音にて声とがす
-----	---	----	--------------------------	---

國太夫 (竹本)

一七八年 (享保三) 十一月初出座 (一邦)	七二七 江戸出羽		天神橋筋濃人橋辺の民布屋全兵五 浄るり小兵なれどふし地事よし 修羅つめはサレ不足 市川團十郎と比ぶ
------------------------	-------------	--	--

熊太夫 (竹本)

七四六	若松	上上吉	嬉しかった見物がとつくる には急	陸奥茂太夫門弟 当年大和太夫門弟として出座 此度「夏祭」六ツ目好評 声はないが味よく取廻し語る
-----	----	-----	---------------------	--

組太夫 (竹本)

一七五三年 (宝丁三) 五月初出座 (一邦)	七五六 竹本	中品ノ上吉	寛潤 同合の仕こなしは笑入りの よい秋の田村	六年前の圓の夏より出勤
七六六	江戸 市の側	上上	いろいろと味ひ有り鏡益 神ほり	

組太夫 (竹本)

七八一九		上上吉	すかくと上りめの見ゆる 手習道	世話の気があるが、何を語っても受けも ふしとけんとしてのびぬよう。 「時代織」六ツ目(安永十、二、竹本)、「おふり 意見の場」、「紅葉」の評あり 「お茶」、「鬼」ニノ切、「天神記」三ノ口、 「近江源氏」セツ目好評 ウツボと云う 大坂にて評判よく新古今にも語る、とくに 「野崎」、「鬼」ニノ切、「姫山姥」ニノ切 「寿門松」新町
八〇六				

桑太夫 (豊竹)

七四六	七六六	上上吉	見へぬほととぎす	
-----	-----	-----	----------	--

又米太夫 (豊竹)

一七五九年 (室戸丸) 三月初出座 (一邦)	七六一	上占	いつ岡でも気の葉が現
	七六二	上上	甲に声いな蟹の穴声出して百い焼塩
	七六三	上上中	名所に名を得しはぶの廿化
	七六四	上上出	いくとはつゝぬ鉄砲の玉
	七六六	豊竹	

倉太夫 (豊竹)

七二七			<p>堀江に住み 豊竹上野の門弟 江戸辰松八郎兵五座に勤める 折々ときよなる声を出す 市川団藏と対比</p>
-----	--	--	--

倉太夫 (竹本)

七六二	江戸	上	舟路を追風てまづろは早く車切
七六六		上上	らかごろふら付よし至正通室

倉太夫 (豊竹)

七八一三	外記	上上	江戸着より御当地の氣を呑みだ新橋のしがらう
------	----	----	-----------------------

源太夫 (豊竹)

七八一九		上上出	<p>里人より素人受の現在鱈 箱荷興行以来後見になる 鉢の木、恋女房の評あり 少しあまへる、まうな浄るり</p>
------	--	-----	--

上野方掾 (豊竹)

七四七三	(豊竹三初太夫カラ)	大上上出	<p>御名は四言に釋く松扇子 内匠埋太夫の子 勝次郎 始め諸国へ出て 後豊竹座へ出勤、三輪</p>
------	------------	------	---

七四七・三		卷軸 大上上吉		<p>大夫、程なく出羽是處へ出座、江戸へ下り好評、再び帰阪して、竹本座で内匠大夫と改め、後豊竹へ、</p> <p>声量は不足するが、節事はかなりとしてよし</p> <p>初名三和太夫とて豊竹座出勤、内匠大夫と改名して竹本座へ、</p> <p>瀬川菊之丞に同じ、</p> <p>小兵なれど取廻りりしく、齋事やつし、つめ所作事の名人</p> <p>段切を大事にする</p> <p>非かなれど素直にして位あり</p>
七四七・〇		〃	<p>声はびろろつどのふとん、とはむくくとするがらとよはい</p> <p>節は鏡のいこ、なせ受領のうっぱ物</p>	
<p>(竹本大和掾 ニツブツ)</p>				

越 太 夫 (竹本)

八〇六				<p>大和屋利助と云</p> <p>評判よきもの、鳴戸、順礼場</p>
-----	--	--	--	-------------------------------------

此 太 夫 (竹本)

<p>一七三三斗(享保十八)豊竹伊太夫初出座、一七三七年(元文三)十月竹本美濃太夫、翌年一月竹本此太夫手形</p>	七四七・二	物巻軸 大上上吉	<p>御功者に見物も耳を揃へた</p> <p>合羽の商売</p> <p>伊太夫と名乗り方々へ出勤の後竹本座へ出て此太夫と改名</p> <p>調子低く(豊越か半越)大入りの時は同之ゆ事あり、しかし大ひらに語るは功者</p> <p>此度の、菅原、三段目大出来</p>	<p>合羽屋伊兵衛、初め美濃太夫</p> <p>声があつて下がつよい</p> <p>ギン美しく、ラレイよし</p> <p>市山助五郎と見立てる</p> <p>すべて功者なれど仕過る事多し</p>
	七四七・三	大上上吉	<p>此人のこへを玉子酒といふ</p> <p>心は下ほど味^{あじ}が有る</p>	

十四。

巻頭
大上上吉

声は床のびやうぶとはひくかてもたてもの
節はなすび香物なせもどってからうまい

ふし付け細く、新ぶし多くて面白いが
真似のぶ米ぬは難造

(豊竹筑前方塚ニツヅフ)

一七四八年(寛延元)十月豊竹此太夫 翌年九月豊竹筑前方塚ニナル(一印)

此太夫 (豊竹)

八〇六

天満屋清五郎と云フ

伊達鏡七ツ目、比翼塚、大鳥村よし

此太夫 (豊竹)

(豊竹時太夫カラ)

七五八

上品ノ上

時めまし評判はいと際返
す三輪の山

十年前の己年冬替り、物ぐう太郎
の時、八重太夫で初出座
連者な声立て、同合よし
今度の、信長記、大評判

七六一

上上吉

どこやらにうまみをもつ椀が相

七六二

上上吉

よい塩をもつた蛤、そのまっくよい煮汁

七六三

功者におしとまほす小車花

七六四

諸人の悦ぶ至寿の玉

七五六

江戸

一説にもてはやす仙台本国米

七六六

まれものといふよろこぶ五銖戈

七八一九	六上上吉	先師の恩を立通す義臣 鬼	詞のつめ合ふうまい せ語多のオ一人者 合邦、蝶ハ、天王寺村、吃又、 并大出来 墨染板、(安永九九、北坂江)、此 度の「白石」六ツ目の評あり 最近は声か低くなる 石田町錢屋佐吉と云う 前名崎大夫、八重大夫 筑前塚弟子で、後に坂江市ノ川で 浄瑠璃興行
八〇六			筑前の三ノ切残らず語る、殊に質店 新口村、合邦、帯屋、壬生村、 出口、三国舞双、三ノ切
一七九六年(寛政八)	七十一才で没	「邦」	

此面太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上上	
------	----	----	--

駒太夫 (豊竹)

一七三五年(享保二十)	八月初出座	「邦」	
七四七二	豊竹	上上吉	評判に乗てくる見物を好む扇子
七四七三		上上吉	此人を昔の紅といふ心は、 裏は能うてへうは見あがり
七四七〇		上上吉	声は同家の隠居、とは裏 が利く□しもを 節は破れた紙衣、なせ初手 の浮気は河処へやら
			素人から直ちに豊竹座出勤 「真鳥」三ノ口が見得り、 大和太夫の真似にて面白かつた 近年は声も落ら、風味が付く 「雀ヶ刺」上の巻は大当り 声の裏と違つうのが名人 山下金作と同じく、へうはサしめいる

七五六

七五七

七五八

幽玄至妙潤色無比

豊竹 大上上吉

御巧者は肩と比ぶる人も無う、
磨き立を男山

人々のせり名人音せつなら程
拍子なり牙へ切つら望目

右座
上品、大上上

歌仙才四喜接法師の歌の意に同じ詞曲
か成疎なれど始め終り正しく前へは雲隠れ
せし秋の月の暁の風に暗るい如し

音曲の道に於ては、一と云うて二三のな
大夫
「前九年」足利茶の評あり

言子保二十年、豊竹座初床の、サ列堂、三アロ
は飄草から駒が出たとの噂

故大和大夫に生字し
「全ヶ刺」上の巻は大評判なるに、其
後しめり氣

延享五年、東鑑、三、詰大出末
江戸へ助に行き、翌年の江戸土産、物
ぐう太郎、二、切大出末

声柄立派に肉へて、向も勿体有り、其の
上女の言葉柔かにして色気深し

砂の物の立化と見る様、心は苔曝の鏡
う中に草化とあしらふ様にしほら
しい所有り

七六一

七六二

七六三

七六四

七六五

七六六

木上上吉

、

、

、

巻軸
木上上吉

江戸 糺上上吉

東の芝居で名人と肩が立る扇相

色も有みなくいはひのさいら酢味噌

香は上なし俗にはうすし蘭のサ化

人の及ぶのないもの龍の玉

此道の賢人といふなり小松米

一座のかしらに立る常平こしゆ

(1) 一七四二年(寛保二)肥前座へ初下り

正月二日より、鈴鹿合戦
三月三日より、石橋山鏡龍、四、切大当り
九月迄にて、その後帰阪

(2) 一七四九年(寛延二)肥前座へ下る

「忠臣蔵」江戸初演、七段目おかる、九段目大当り
二の替り、「御狩巻」三ノ切大出末
冬に帰阪

八〇六				<p>(3) 一七六四年(宝暦十四)下り 「番場忠太」三ノ切大出来 五月節句より「信長記」 冬に帰阪</p> <p>(4) 一七六六年(明和三年)下り 「和泉式部軒端梅」三ノ切大出来 二ノ切日「中臣藏」九段目大当り 九月帰阪</p> <p>此人高調子上手なり 評判よきもの「サ列堂」三ノ切「和田合戦」三ノ切 「釜ヶ判」硯海「東鑑」三ノ切「もの草」三ノ切 「一谷」三ノ切「信仰記」四ノ切「三ノ口」岸姫松 四ノ切「番場忠太」三ノ切「蘆浦」琴々責</p>
一七七七(安永六)没(邦)				

駒太夫 (豊竹)

七八一三	外記	ほらび 上上吉	誰もうまいと云ふ名物の駒 が出る瓢たんやのそは	<p>一七六七(明和四)春 肥前屋へ初下 り「頼政逆善芝」四段目以来十六年 ぶり「阿古屋」へ三味線名ハ好評 「忠七」はかる大当り</p> <p>江戸表下り以来受けよし 結構な声で父親によく似ている 何を語っても同じ様に因る 南の「由兵衛」茶屋場の評あり 八幡すしと云う 親の語りものなり</p>
八〇六				
七八一九		上上吉	語り出しは花やかな江戸茶	

是太夫 (竹本)

七八九	上上書	小つぶてもからいは三社太夫
		北の「かしく」上の巻好評 器用で上手めき過る 人真似がうまい

佐賀太夫 (竹本)

七六四	土佐	上	中	
七六五	江戸	上	中	声かゝる様にとひいふと松代米

崎太夫 (竹本)

七六六		上		段々出せ有べし宣和けくほう
-----	--	---	--	---------------

咲太夫 (豊竹)

七六五	江戸	上		のびやかに見渡す様と彦川米
-----	----	---	--	---------------

咲太夫 (竹本)

一七六二年(室ノ十二)七月、竹本岬太夫カラ改名(一邦)	七六三	上	上	肉てしほらしいわふよふの花	
	七六四	京都	上	上	ひょうしに、よくある舟玉
	七六五		上	上	いろくゝ心の多何や加賀米
	七六六		上	上	時に取りての作有治予けんほう
	七八一九		上	上	どこやらが大将の芋文談
八〇六					声物はよし
一七八一年(天明元)竹本田男徳斎ニナル(一邦)					妻の音が可愛らし過る

「塩飽」三ノ口(安永五、九、竹本)「布引」
三ノ中(同七、四、北新地)「安土」二ノ切
(同九、一、竹本)「時代織」二ノ目(同十、
二、竹本)の評あり
田男徳斎と云う
大坂にて評判よく千ヤリ語りの上手
「味骨」序の口、「伊賀越」六ノ口よし

佐太夫 (竹本)

七六一	土佐	上	豊竹本と一所にならば扇橋 舟路と追風てまづろは早く車切 世にはびこりて目出度福の花
七六二	江戸	上	
七六三	〃	〃	
七六四	土佐	〃	

薩 廣太夫 (豊竹)

七六一	土佐	上上	うまみけかまぼこ同せくのさめが橋
-----	----	----	------------------

薩 摩縁外記

七六六	外記	不出	座本
-----	----	----	----

佐 渡太夫 (豊竹)

七六四	上上	ふくくでうまみ有る黄煎火の玉 ウしつつ舌打する様に織却米 はやい御出世陸子互いほう
七六五	〃	
七六六	江戸 上上	

佐 渡太夫 (竹本)

七七七	肥前	上上	いつでも評判はよしの里に
		上上	したるいこじつけな語り様でうしに 癖あり此度の、千軒長者、序切好評

左 内 (竹本)

七二七			竹本座の甥との事 竹本座から豊竹座へ、そして江戸へ下る 勝山又五郎と対比
-----	--	--	--

左 馬太夫 (陸竹)

七四七三	上上	未だ評判知れず
七四七〇	上上	
		声は如茂さむらい、とはうらがば、い 節はごまのはい、なせごまかにせ、る

佐世太夫 (竹本)

七六三	京	上上	波打ぐわの鶴殿花	〔竹本佐代太夫〕
七六四	〃	〃	ちん／＼こかすを見せる水玉	
七六五	〃	上上	見所同所多近江米	

沢太夫 (竹本)

七四六	七太夫	上	うまみなるふてかしまし程わめくよし切	若松座で「夏祭」序切。セツ目因七を勤める
-----	-----	---	--------------------	----------------------

沢太夫 (竹本)

七五六	竹本	上上士	対揚 一流の思ひ入まら外にあらめ橋
七六一	土佐		

沢太夫 (竹本)

七八九	上	
-----	---	--

佐和太夫 (陸竹)

七四七・二	上上士	声ばらはまやしやでうれいな京扇子	声、カ即ともしよいが、淨るりの小さい陸奥太夫門弟から播磨太夫門弟に分る。女舞、六ツ目大当り。当地では未だ馴染みなし(尾張任か)佐兵エと云う。もとは旅芝居の三味線弾。陸竹芝居のつき出しより好評。音声よく、取廻り発明にて、ふし竹面白し。おとし一流かほり、思入れにあてん争と才一とす(見物受けよし)。嵐新平に同じ。声は非力
七四七・三	上上士	此人の上るりを珊瑚球といふ。心は、大きければ大銀に成	
七四七・〇	〃	声はつよ気の相場、とはどぶぞあけてほしい。節はらりめんのかへ世帯、なせしめる程しうがえい	

鹿太夫 (北本)

七六四	上く	人によりて賞観するのびるの玉
-----	----	----------------

志賀太夫 (竹本)

一七六一一年 (宝暦十一) 十一月初出座 (一邦)	七六二	上上垂	教壽屋の菜蝶句と岡て客はつぼ入
	七六三	上上曲	あけそうぼふ紫のかほよ花
	七六四	上上曲	終にわ名を得しへくくわが玉
	七六五	江戸	岡人かくにらへあとも岩付米

式太夫 (竹本)

一七三二年 (享保七) 一月初出座 (一邦)	七二七		陸奥茂太夫門弟 音曲丁寧なる故るり目なし 声よく浄るりのわけさつぱりと岡てる 巾のや童即兵正と同じ 話、段切に心とくばれ
一七四〇年 (元文五) 退座上洛 (一邦)			

式太夫 (豊竹)

一七五四年 (宝暦四) 十二月初出座 (一邦)	七五六	豊竹	丁寧
-------------------------	-----	----	----

重太夫 (竹本)

七四六	七太夫	上上	切者にすねこびたかうりんの鳥
			去丑の初冬より外記座へ出座 声はないが、子供の糸懸の如く よせた芸
			故河内太夫の語り口をよくうつし、 十五段、三ノ中、夏祭、好評

繁太夫 (豊竹)

七八一、九		上	
-------	--	---	--

七太夫 (竹本)

一七三三年 (享保十八) 十一月初出座 [邦]	七四六	七太夫	座本	去年今年打続大入に小判のさざ浪く寄る孔雀	(外記座マ本としての評)
			上上吉	当々と言だすはどろまんのわかれの鳥	播磨ノ掾門弟 広太夫として「応神天皇八白幡」の所西の座へ出る 辰松初下りの「武烈」三ノ切は不評 その右、ひらかるし、御所桜、三ノ切、三座太夫、大当り 当春「夏祭」初三八を勤む 地合に「うま味」付け、まうと語る故、もれれがいて序破急なく、長場はなれて退屈

七太夫 (竹本)

七六六	上上	よいくとほめます承和昌ほう
-----	----	---------------

七太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上上	いつでもしつかりとう、ちからのある相撲とりがうやく	肉ぢからのある語り口 声不足
------	----	----	---------------------------	-------------------

志津太夫 (豊竹)

七六四	肥前	上	のびやかに見渡す様也房州米
七六五	江戸	上	

品太夫 (豊竹)

一七二五年 (享保十) 五月初出座 [邦]	七二七	一七三三年 (享保十八) 十月 豊竹河内太夫ニナル [邦]	上野弟子。去年迄他国巡業 享保十年六月頃「身替ろ張月」を少しの間助け 同年十月朔日より上野芝居出勤 声よく花やか、乙女にして肉ぢよし 間拍子採に定じてうつつる故、見物受けよし 沢村音右エ門と同じ
-----------------------	-----	-------------------------------	--

呂太夫 (豊竹)

七四六	若松	上上	いつても子供がよろこぶあめの馬	奥州生まれ、ナマリ多し 先年始めて辰松座へ下り、小京 三ノ口好評 声は美しいが、年寄に若く女座 と持たせた様なき 夏祭、評あり
-----	----	----	-----------------	--

信濃太夫 (竹本)

一七四七年 (延享四)	八月初出座 (一邦)	上上+	声は嵯峨の名物、とは名ほどあり大竹 節は三里にやいと、精出したら違者になら
-------------	------------	-----	--

信濃太夫 (北本)

七六四	北本	上上吉	見物にわれ先にと生玉
七六六	豊竹		

島太夫 (豊竹)

七二七			堺をびす島出身、豊竹座出勤 己の年(一七三五年)の暮江戸に下り、国太夫 と一筋に勤めて好評 干末の年も江戸 音声句ありて遠音をさし、修羅話の類 きびしく、文句のあやふれよく聞える 丹前歌争の類はサレ申分あり 松本幸四郎と比べ
-----	--	--	---

島太夫 (竹本)

一七三九年 (元文四)	四月、竹本志平太夫トシテ出座 (一邦)	上上吉	御出せは次才くくに 末広扇子	幾竹屋平右衛門 声大場にして、ウレヒせりお共にはつきり こして嫌味なし、修羅もよし 節落しの引捲く、或は地のとまりにも 長う引かる、は申分あり 菅原、四ノ話大出来
-------------	---------------------	-----	-------------------	--

(竹本志平太夫ニツヅク)

志平太夫 (竹本)

七四七・三	上上吉	此人の上るりと鞍馬のふで あるしといふ心は、うへ より下へ取る	八白屋平右エ門 修羅、詰、荒争は大丈夫にて 中山新九郎に同じ 浄るりの一体を崩さず、語りかしく 争すまよじく、声は誰にも劣らぬ
七四七・〇	上上吉	声はみなみの御堂様とは 高いてんじようじや 節は毛とうめんのおびな ぜつよふても中から下	

(豊竹若太夫ニツツク)

一七四八年(寛延元)十月豊竹島太夫 一七五〇年(寛延三)八月 二世豊竹若太夫ニ
ナル(邦)

嶋太夫 (竹本)

七六六	極上上吉	びやふには上なし大関 ろくしゆ	一せ一代も終り引退さる。 初床は竹本座、盛衰記、三ノ中大出来、 菅原、四ノ切大勇、忠臣蔵、東へ、この時 橋供養、四ノ切大勇、かしく、新屋敷好評 和田合戦、若太夫と改め、信仰記、三段目の後 暫く退座、再び嶋太夫として竹本座へ、廿四孝、三段 目大出来、忠臣講釈、嶋太夫好評 声かうますがるが、ラレヒよし、鼻声 スワウ丁平右エ門と云う 越前権孫にて大立もの、美音、なう 評判よきもの、菅原、四、橋供養、四、八重葎、 新やし、物ぐら、四、二谷、組行、四、切、信仰記、三 祇園女御、三、廿四孝、三、講釈、八、出せ、七
七八一九		誰かごいふても此道の 一谷	
八〇六			

一七八四年(天明四)九月十日没(邦)

嶋太夫 (豊竹)

七四六	辰松	上	店下上るりのけは能ぬけま したつほくら	石橋山評あり 木挽町の太子伝国性太郎三ノ中好評
-----	----	---	------------------------	----------------------------

嶋太夫 (陸竹)

七四七・三	陸竹	上上	此人をなら嶋といふ心は同じ 嶋でもうすふてよはる	地美しく修羅は強いが修行不足 泉平三郎と同じサ化車方でせう 口跡よし
七四七・〇	〃	〃	声は当代のぬり芝こはらと 花者めいた 節は靴 <small>カウ</small> あたまなせ越 前の流義	

嶋太夫 (竹本)

七七七	肥前	巻軸 上上吉	角力ならだてかいうみ川 目頭負はわさく流る	去春和佐太夫から改名 浄るりの性根正しく、きれい
七八一・三	〃	上上吉	誠に上るりの根づよき誇う らは、いかにぬ大ぶつもら	〔豊竹島太夫〕 初名 和佐太夫 肥前座初下りは、三勝し書置の段 その後休座多し 改名披露の外記座一才の台は 大出来 当春、むかし唄し十段目の評あり

寿 楽 (竹伊勢)

七七八	肥前	上上吉	ふりゆくものはとほしまる、 名人	古風な播磨ぶし、加太夫節から とって来た浄るり故当風に向かぬ 現在は隠居
-----	----	-----	---------------------	--

信太夫 (竹本)

七六五	京都	上	島	うつくしうてわらぬ伊万里米
-----	----	---	---	---------------

信太夫 (豊竹)

七八九		上		
-----	--	---	--	--

新太夫 (豊竹)

七二七				去年より出勤。元来は商人
-----	--	--	--	--------------

(後の豊竹肥前様カ)

新太夫 (豊竹)

(豊竹伊勢カ夫カラ)				
------------	--	--	--	--

七五六	豊竹			功勞天晴
-----	----	--	--	------

七五七		上	上	高
-----	--	---	---	---

(豊竹伊勢カ夫ヘツツク)

秋を待つばかり心変わりぬ
江戸にないほどの高尾山

橋洪養、二段目大出来
前九年の評あり

新太夫 (豊竹)

七六一	肥前	上	上	改名で同人までも新橋
-----	----	---	---	------------

七六二	江戸			うまさふなまゆのみ肥合 身は生乾
-----	----	--	--	---------------------

七六三				やすらかにふつくりと綿の化
-----	--	--	--	---------------

七六四	肥前			よく人の知ったお杉お玉
-----	----	--	--	-------------

七六五	江戸			師匠の風によく新田米
-----	----	--	--	------------

七八一三				
------	--	--	--	--

歌門太夫事新太夫とある
歌門より新太夫になり、暫く
外記座元改せし所病に死

新太夫 (豊竹)

七七七	外記	上	上	新太夫 / こそ名はまらぬ 立にけり
-----	----	---	---	-----------------------

七八一三	外記	上	上	ますく、紫馬のさかり根つま 染井の榎木みせ
------	----	---	---	--------------------------

はね二代地松屋十兵衛
セツから浄るりと語り、古新太夫門人として
七太夫と名乗る
去年より座元殊で、当年十九才
御藏前代地松平十兵衛、古新太夫弟子七太夫
安永四年より座元になる

須戸太夫 (豊竹)

七六一	肥前	上止書	昏々かくしくする声のさかりはスラ橋
七六二	江戸	上上士	町中へ興をかっほのめらやらつけ
七六三	、	上上書	ひいきにひかりをます仙翁花
七六四	肥前	、	とくだ事だと言い立る人玉
七六五	江戸	、	年々に評判茂る森山米

住太夫 (竹本)

七五七	京都	上止	いっ同くも見物の面白がる 地主の桜	やわら饅頭の蒸しまま淨り との評判
七六一	、	上止	声うつくしう角のさい丸みのかう餅	
七六二	、	上上書	次オにはづみのくる手まりの花	
七六三	、	上上書	調法は白がねの小玉	
七六四	外記	上上書	依も類なししつかりと能き岡崎米	
七六五	京都	上上書	何れの座でもちと取至和けんぼう	
七六六	、	上上書	秋の田のかりそめならぬ上る りの巻頭	石町三丁目やしん道丸や文藏 初春の、いさな陣取し三ノ切不評
七七七	外記	上上書		

一七五七年 (宝アセ) 七月初出座

七八一三	〃	繻上上吉	卷頭にすへてきつとよきよ す因十郎もぐき	浄ろりは少し上品でないが、千本 桜、ニ、切は好評
七八一九		上上吉		明和元年外記座へ下り（姫松三 ノ口、千本ニノ口）以来江戸在住、 数年前の「長き陣取」ニ切は 不評
八〇六				「大口」ニ切、去年「ひらかな」ニ切 此春の「忠臣藏」四ツ目好評
一八一〇年	（文化七）三月十九日没	（一邦）		困根とも住吉屋文藏とも云う 二代目政太夫の弟子にて三ノ切語り、 取分け江戸にて好評 能く語りしもの、「伊賀越」ハ 「五大カ」三、四「かみ山」七 「花上野」志渡寺、本町育、いと や、孝行酒屋

駿河太夫（竹本）

七六二	江戸	上上	下へむく物もうは油けがはす番油
（竹本河内太夫カラカ）			

諏訪太夫（豊竹）

一七五六年	（宝厩六）十一月初出座（一邦）		
七五七	豊竹	上上士	此の道と御磨き故曇り氣の ない鏡山
七五八	中品ノ上		出せに從うて名もはなも高くな るらん鞍馬天狗
一七五九年	（宝厩九）十一月江戸ヨリ帰阪、翌年十二月退座（一邦）		三年前の子の冬、初出座 声柄太夫

関太夫（竹本）

七七七	外記	上上吉	師匠の風は当世にあふ政の 関太	去春始めて下る 筆太夫とよく似た声
-----	----	-----	--------------------	----------------------

袖太夫 (竹本)

七六六	京都	上 止	あまりやはらぎすぎた元和通宝
七七七	外記	上 止	難波へのあしからぬあしわく
			こほしいへきの藤七

其太夫 (豊竹)

七六五		上 止	折節にはかざる、姫路米
七六六		上 上	いきほひにひけも有沼煎けんほう
			(竹本其太夫)

私太夫 (竹本)

七四六	辰松	上 上 吉	しゆら争のてひしごとや出の わし能鷹
			当地始めて、 此度の「評節前」三ノ切大者リ 大坂にて「武烈」田村三ノ口 久米仙人、五段目好評

一七四〇年(元文五)四月、豊竹私太夫初出座。一七四四年(延享元)十一月、竹本三ノ口

染太夫 (豊竹)

七二七			豊竹座から江戸に下り辰松八郎兵卫座を 勤める。その後下総の銚子で芝居興行の 後、江戸出羽芝居へ出座。 大坂を離れている故、音曲我がま、 坂田半五郎と対比
-----	--	--	--

染太夫 (竹本)

七五六	竹本	上 上 吉	寛 稷
七五七		上 上 吉	何時の間に此の様なる名人になり 給ふとあまされる富士の山
七五八		上 上 上	程拍子の思ひ入浅くは見えぬ 玉の井
			今ヲき日の出の執ウ 「凱陣紅葉」は大出米 「姫小松」の評あり 五年前の冬、初出座 西の座にて近年の掘出し物 声柄よく浄るりの間合ひよし 「芝居摩歌」春日野小町、大出米

一七五四年(宝暦四)十月初出座(一邦)

七六一	上上吉	引めてよく取むすぶ帯箱
七六二	〃	上品トたわらうには極札と何やう
七六三	〃	あたりつつけし百日紅の花
七六四	外記	世界に先を顕す夜老の玉
七六五	〃	此節何と人々すいて因く又留米
七六六	〃	らいつふても無るいの布泉銭
七八一九	大上上吉	見れば見るほど 手ごもつら極彩色
八〇六		<p>多クさくうれしもさくくいが、物によって感涙を流す 詞は播磨の流義で男女を分けず ふし付けは少し細かいが、無理なくさら／＼語る 何と語っても申分のない立者 初床の「小野道風」ミノ中、道行好評 時代織「ハツ目の評あり</p> <p>中興の上手にて新物面白く節を語る 評判よきもの「日高川」四、「菊水」序、「安達」序 「極彩色」大川町、「廿四考」二、「講釈」四、「妹背」五 オ・三、「伊賀越」五、中六、切、「故興弁」八白屋</p>
一七八五年	(天明五)	四月十一日歿 (一印)

染太夫 (竹本)

八〇六		京屋幸七と云う 前石碓太夫 評判よきもの「鰻谷」
一八〇六年	(文化三)	十一月三十日歿 (一印)

大太夫 (北本)

七六四	北本 上 上	一風かわったあ人はい味噌の玉
-----	--------	----------------

高太夫 (豊竹)

七八一三	肥前 上	
------	------	--

多賀太夫 (扇谷)

七六五	四奈南	歌舞夜出勤
-----	-----	-------

龍太夫 (豊竹)

七六一	肥前	上	豊竹本と一所にあらぶ扇橋 すさむらいの有つてうまい穀汁 よらすくわらす <small>(ムシ)</small> の花
七六二	江戸	上	
七六三		上	

内匠太夫 (豊竹)

七七七	外記	上上音	名は高砂の松島貞は誰に も されいどうまいを瀬戸もの 町の白玉もり
七八一三	肥前	上上音	
			急びす屋のス四郎 去年初下り 「あさな陣取」千本、四中好評 安永五年外記座へ下る 「双蝶々」米屋、妹背、ミツ話大あり 当春、むかし唄、六ツ目の評判あり 古大和歌と知らぬ者精出して、肉苜 之 当せミサレ混せてほしい

内匠太夫 (竹本)

八〇六			豊屋ス四郎と云 評判よきもの、謙倉山、セツ目 「博多織」中ノ巻
-----	--	--	---------------------------------------

武太夫 (豊竹)

七八一九		上	
------	--	---	--

親母 (竹本)

八〇六			筑後塚芝居と勤め名人にて「国性爺」 九仙山度々語る
-----	--	--	------------------------------

玉太夫 (竹本)

七六三	江戸	上	せにはびこりて目出度稲の花
-----	----	---	---------------

多美太夫 (豊竹)

七八三	肥前	上止	
-----	----	----	--

丹後掾 (若松)

七四六	江戸	座本	全持には金か金もふける大入室袋も若松に鶴
七六二	"	切上上吉	名物の舞りやりはいつもかほらけやき
七六三	"	巻軸 切上上吉	小金にちとへしもの山吹の花
七六四	"	上上吉	古きと尊ぶ生身玉
七六五	"	"	う年も替らす岡ちし豊田米

千賀太夫 (竹本)

七五七	竹本	上上吉	誰も手を揃く程の柔らかな さは又とないならこうらわ る桜川	言葉がせわしい 「姫小松」の評あり
七五八		上上吉	華やかにして而もすくな る桜川	十一年前の辰(寛延元)の冬替り 二度目の「大内鑑」より竹本座へ 出座 声の美しさ、素直さは師匠大和掾 以上
七六一	京都	上上吉	一帯の風思ひ入深草の焼塩	子年(宝暦六)に江戸へ、丑年に 帰阪 当時は京都出勤
七六二	"	"		
八〇六				前名内匠太夫 大和掾弟子にて事知り甚ごと語り、 「復護若くは打は此人の節残れり」

一七六八年(明和五)十一月五日 六十九才で歿(一邦)	七六一 豊竹 極上上吉 管入の道具めつらに見せぬ 刀箱	但し、初回合戦、頼政、村萱、一谷、義仲、前九年、三ノ切は大出来、年経し語り手なれば、次才に調子も低うなつて同苦しい様なれど、吉世の人氣を能く察し、工夫を凝らす、尊い聖人の説法を聴向する様、心は、肉を所は尤もしく感じ入る様な所も有れども、声化に面白い事は近比になかつた。
		(前名)合羽伊太夫、美濃太夫、此太夫トモ云、此人橋磨の跡を勤名人なり調子よく、ほしめ生涯評判よろしき戯題、富士見西行、夏まつり、楠、菅原、千本桜、忠臣蔵、橋供養、八重桜、物草、玉藻前、一谷、勲功記

千代太夫 (竹本)

七四六	休	上吉	わいらやうしくて周延する帝世の長鳴鳥
-----	---	----	--------------------

千代太夫 (豊竹)

七八一三	外記	上	
------	----	---	--

津太夫 (豊竹)

七六一	外記	上	豊竹本と一所にあらば扇橋
-----	----	---	--------------

綱太夫 (竹本)

一七六一	年(宝暦十一)	一月初出座(一邦)	
------	---------	-----------	--

七六一		上吉	ういしくしうてはふ気がはり箱
-----	--	----	----------------

七六二		上上	一寸しら者に馬力はみくと酢みそ
-----	--	----	-----------------

七六三	江戸	上上吉	初めて見て悦ぶ給ふかはちやの花
-----	----	-----	-----------------

七六四	京都	上上座	さびましほらしいはす、玉
七六五		上上座	細過てめつらに盛 <small>(つ)</small> の唐津米
七六六		上上座	こまかにいたさる、宣徳通宝
八〇六			シンラウシとも云う 三ヶ津にて評判よし 生涯の内名高きもの、妹背、ニ、切、ふかセ、 「秋津嶋」、近江源氏、九、大津、女護島、 ニ、切
一七七六年(安永五)十月十三日没(一印)			

綱太夫 (竹本)

八〇六			猪の籠甚兵と云う 前名浜太夫 「河増」評判よし
-----	--	--	-------------------------------

恒太夫 (豊竹)

一七五七年(宝丁七)十二月初出座(一印)			
七五八		中品ノ上	馴染みはなけれどさきより 肌なと謹も夕顔
一七五九年(宝丁九)三月肥前座へ下ル(一印)			丑の冬替り初床

常太夫 (陸竹)

七四七・二	陸竹	上上	此の人と名の前のほそつけと いふ、心はほそふてもほそけれが 仕る
七四七・三		上上	座敷浄るりにして、床にては通 りがらし ふし争景事面白し 嵐助三と同じく、ちまっころとし て利口 上へは行くし
七四七・〇		上上	声は、うづきみやけ、とほらまっころやま 節は、よこれじゆほく、なぜどこやら、うらつく

常太夫 (竹本)

七六一	京都	上	正	かるふてきれいなしみつところてん
七六二	,			
七六三	,	上	上	くせのないもの山菜お化
七六四	外記	,		誰も面白しこ引長澤の玉

妻太夫 (竹本)

七六三	江戸	上		せにはびこりて目出度箱のせ化
七六四	土佐			
七六五	江戸	上		のびやかに見渡す様也房州米

鶴太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上		
------	----	---	--	--

出水太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上	吉	小江戸初下りにてよいといふ 祇園細工のふぼこ
				興存寺で初下り披露 素人にて染太夫門弟 当春むかし唄レナノ切評あり

出水太夫 (竹本)

七八一九		上		
------	--	---	--	--

出羽太夫 (竹本)

七六一	土佐	上	上	評判にかすと重る呉服橋
-----	----	---	---	-------------

東治 (豊竹)

七八一三	肥前	上	上	吉	ますく繁昌のうかり 根つよき染井の種木 みせ
					肥前塚段後 豊竹文字太夫芝居後見の所 藤井小八塚類を以て、この東治と松茸養子 とし 肥前の跡と龍がせる 当春類焼有れと、正月二十七日より初日

時太夫 (竹本)

七四六	七太夫	上上	芸ぶりふりこぶにくるかい つむり	以前は梅太夫として徳城座の座本 その後肥前座で春太夫から時太夫 此度「夏祭」三ノ口六ノ切を勤む
-----	-----	----	---------------------	---

時太夫 (豊竹)

一七四九年 (寛延二) 十一月	豊竹八重太夫初出座	一七五一年 (宝元) 十二月 改名 (一印)	適時強健	器用肌な音曲
七五六	豊竹	上上	はらのよい手ごわりにれん中の まよ慈道具箱入の通天	筑前才塚門弟
七五七		上上		「前九年」の評あり
(豊竹此太夫ニツヅク)				

時太夫 (豊竹)

七八九	上上	齋	一いよとはわいらよしん入相 花王	京都へ行く 「月見松」序切 (女水田九海江) 好評
-----	----	---	---------------------	------------------------------

時太夫 (豊竹)

八〇六				カサゴと云フ 妹背門松、油屋名人なり
-----	--	--	--	-----------------------

時太夫 (豊竹)

				源七と云フ 前名入太夫 評判よしの「太功記」セツ目、狭間 人の戦し、五ツ目
--	--	--	--	--

土佐太夫 (竹本)

七五六	竹本		切術珍重	
七五七	京都	上上	メリ能う御名人奥深し所の みへろぎふくほやし	浄るりが落付きしめりがいよ 房太夫と云う時合から殺々連者 三段目語りにしても憎うない
七六一		巻軸 上上	むつくりとうまい盛箱が饅頭	

七六二	京都	卷軸 上上吉	座中しんとする茶の拵
七六三	〃	上上吉	〃
七六四	外記	上上吉	世に沢山に有まじ獅子の玉
七六五	京都	卷軸 上上吉	所替らす勤通しら長門米
七六六	〃	上上吉	惣座中のるうをしづむる半両錢

一七六六年（明和三）十二月、竹本房太夫ニナル（一邦）

土佐太夫（竹本）

八〇六			又兵五と云う 至って名高し、併し是ぞと云う事なし、少しの内 三代目政太夫となる
-----	--	--	---

土佐太夫（豊竹）

七六二	江戸	上上+	うすみそてこらは大根のかはむさ
-----	----	-----	-----------------

土佐太夫（竹本）

七四六	若松	上	上るりの一体かんとする様なしきの鳥
-----	----	---	-------------------

土佐太夫（竹本）

七六一	土佐	上	豊竹本と一所にあらぶ扇輪
-----	----	---	--------------

土佐太夫（豊竹）

一七五三年（宝丁三）十月初出座（一邦）			
七五六	豊竹	上上高	交夫 とかく若とてうぶなこが児 手柏の一声に信田の森 語り方の勇ささほむ口に は地信山 大に上つらと岡人手と打て致 箱
七五七	〃	上上高	前九年の評あり
七五八	中田ノ上上		六年前の雨の冬、十七才にて初床 大音にて丈夫
七六一	上上士		
七六二	江戸	上上高	かるい所はあんこう諸人の好く 目利道く

七六三	陸竹	上	上	ふもとの盛にびやかなもものサ花
七六四	陸竹	上	上	やわらかそふに見へて堅い水生の玉
七六五	陸竹	上	上	盛も名物えを見る赤穂米

戸根太夫 (豊竹)

七六六	豊竹			
-----	----	--	--	--

富太夫 (陸竹)

七四七・二	陸竹	上	上	うれい事は立にしほる袖扇子
七四七・三	陸竹	上	上	博勞所稲荷の六兵五 昔は産花やかにて、上地かんの所など 身内がらびを程よし 越前と大和の両方の口うつしが一つに なつたため、浄るりの行義がくづれて 詞と地の区別がつかぬ いなう六兵五 年配にて音声下落 氏屋四郎五郎に同じく、音曲あり
七四七・四	陸竹	上	上	此人の上るりと同夫といふ心は、 るひもむまひ 声はくつらくあらま、とはかくふけました 節は末社の神、なぜ福利からの仕似せ

富太夫 (竹本)

七五七	京都	上	上	お上手といふほどこそ近も隠れない真高と原
七六一	京都	上	上	近年のめう、と上つて六条見せんべい
七六五	四奈角	上	上	歌舞伎出勤

(一扇谷富太夫)

富太夫 (豊竹)

七六二	江戸	上	上	舟路を逆風まざづろは早く車切
七六六	江戸	上	上	ぬんせい打ひらいた天啓通室

留太夫 (豊竹)

七四六	休	上	上	からいとすてはくろが ぬももてらつ、さ
				辰松初夜は、鏡板三の初と語る 語り口せはしく詞の尻と一句、に押付ける 辭カしなほる 芸程に評判なまは花やかになす故也 辰松の「さよふ衣」四ノ口は近年の大当り 道満、序切、清和、三ノ口、冠合戦、四ノ口 風俗太平記、三ノ口好評 若松屋でははか、しき役つかず

友太夫 (竹本)

一七四六年(延享三)正月初出座(一邦)

七四七二	上		
七四七三	上上吉	此人といかのほりといふ心は空々ようなる	吉田四郎と同じ
七四七〇	上上	声はつめ袖のけい子とはじみでさみしい	
七五六	竹本	節は町のめいわく、なぜまあワキでもめ	
七五七	京都	功術珍重	
七六一	外記	御名人なつめへは香もある軒端の梅	巧者、何時でものっ
七六二	江戸	人の面白がる場の多い内国橋	しりと鶴の歩みか
七六三	上上吉	しやくとして舞はさびもしはらしき二本居	
七六四	土佐	しっかりと手あつい橋のせ化	
		誰が見ても愛するさくごの玉	

友太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上上	追善でよいといふむすめが	音太夫追善の意より
			出た瀬戸物町の干物みせ	

豊太夫 (北本)

七六四	北本	上上	替りに違る、もの吹玉	
-----	----	----	------------	--

登代太夫 (竹本)

七六一	土佐	上	豊竹本と一所にならぶ扇橋	
-----	----	---	--------------	--

名尾太夫 (竹本)

七六一	土佐	上	豊竹本と一所にならぶ扇橋	
七六二	江戸	上	すききらいの有つて、うまい鼓汁	

直志太夫 (豊竹)

七八一三	外記	上上		
------	----	----	--	--

中太夫 (竹本)

一七五六年(宝暦六)二月初出座(邦)

七五六	竹本	対揚	「竹本中太夫」
七五七	〃	しめて聞く程音声の出る御出せは 鼓がたふ	「姫小松」の評あり
七五八	中品、上品	又ある時は立物象が休む思ふに 肩をかざる山姥	三年前の子の春初出座
七六二	江戸	一塩あてるとむつはたいにまじり ぼろくに似たりよふる芍薬の花	
七六三	京都	日の出に舞いづる千玉の玉	
七六四	〃	鐘のどくとく鳴し給へ八田木	
七六五	〃		

(三世竹本政太夫ニツヅク)

一七六七(明和四)十二月、三世竹本政太夫ニナル(邦)

中太夫 (豊竹)

七四六	休	声に折れなく大つぷにこけ るまめ馬	きれいなれども、淨より吉風にてかた し 旧冬看板出しが、夏祭、休座
	上上		

長門太夫 (竹本)

七八九	上上音	詞にしろ声のない馬塚	去秋より上京 此の「三日本平記」三ノ口(安永七九)南の 「源治」ちよんがれ好評
-----	-----	------------	---

長門太夫 (竹本)

七五六	竹本	功術珍重	帰り新考、久々の病りの出勤 「姫小松」の配役あり
七五七	〃	少さうてもどこやらにさく所の あるへア宮の本林	
七六一	京都	折々考りの来る天わた牛彦	
七六二	〃		

長門太夫 (豊竹)

七四六	休	上上齋	しづくるはとほなれ給はぬ かごの鳥	吉原に住む故、吉原新太夫といっ たが、鳴太夫から長門太夫になる いつの程よりか評判うすらぐ
-----	---	-----	----------------------	---

名太夫 (竹本)

七八九	上			
-----	---	--	--	--

鳴渡太夫 (竹本)

七六二	江戸	上	舟路を遠風てまづろは早く車切
七六三	〃	〃	世にはびこくて日出度箱の花
七六四	上佐	〃	

錦太夫 (竹本)

一七三七	年(元文三)	七月	豊竹和佐太夫トシテ初出座	一七四四年(延享元)十一月改名(一邦)
七四七・二	上上齋		節付の名人身内が拍子 扇子	のわつたに節付を能くする 拍子よく、つめ修理よし 幕政の時は播磨のもの、豊竹座で和佐太夫 といつた時は評判よし、それが滅入って再 び竹本座へ出勤、しかし、西行、三ノ口、楠 三ノ口は好評
七四七・三	上上齋		此人を太夫年寄といふ 心は、浄るりの事知り	幕屋武兵卫 初めて筑後に出た時は和佐太夫、その右 暫く休座、又々竹本座へ往む時は、古脚 へ錦を飾れといふ義で錦太夫と改名、 声柄悪けれど姉川新四郎と同じ
七四七・〇			声は祝言の二日五い、とほもふわれました 節は切をへらすつぼん、なせ川中のすい	

七五六

竹本

風雅名譽独歩無格

歌仙才六六伴黒主の歌の心に同じ頗逸
興有然共方し野都也譬は新と負る
人の花の蔭に休めるがごとし

七五八

上品・最上品

語り方の面白さに見物
蒙の誉るかけはへは百

元文二年豊竹座「雀ヶ刺」中の巻大当り
が初床。以末子の年迄八年同好評
子年の冬、竹本座へ移り「西行」菅原
「忠臣藏」布引、「大峯桜」大当り
どうしたら訳やら此の一兩年は折々出たり
引たり

浄るうは方し下品な仕出しにて、ニ三四
の語の場にては、遊が軽う因える、
高位なる人形若侍、別しては女形には
声の鼻へ入って岡若し、其の上程歎の
場は哀れにはなうて可笑味が出る、
下考な在所の翁婆の子ヤリは能い

七五九

七六一

七六二

七六三

七六四

七六五

外記

不
隠り

ナ上上吉

大上上吉

大上上吉

出して遣ふとよく切れる剃刀節

丹花の唇は赤貝よくせうが酢

美しく盛とちもつたさつきの世化

尊く言ひはや字賢のみ玉

節はるいなし最上の上佐米

声の鼻へかゝるのは生れ付だが、其の声
の對生に付て語りこなさるゝは切者上手
と、人々の「春日野小町」ニ、語道行
四の口は近年の大考り
八瀬や小原の黒木虎の様、心は、名に
高き名物なれど女の言葉が鼻へ入て
賤しい

其のさよはいやし、世もよく語れども
子ヤリにて考を取る
いは顔のこはひかけこの子供に菓子
とやるが如し

錦武ト云う

前名 和佐太夫

此人異風なる声にて面白し上手なり
生涯語りものゝうら好評のもの

- 釜ヶ利 竹藏 富士見西行 ニノ
- 楠 ミノ 菅原伝授 四ノ
- 千本桜 序切 忠臣藏 六ノ
- 布引 三ノ 志女房 六ノ
- 道風 ホウリン 姫小まつ ニノ
- 日高川 ニノ 菊 水 四ノ
- 宗禪寺 差所

錦太夫 (竹本)

七八一九	(竹本家太夫カラ)	師の名をゆすり受た二代鑑	の太夫改名 此度天神へ出勤
------	-----------	--------------	------------------

西太夫 (竹本)

七四六	休	上上世	出語のどんふうは祖師の傳 のこるめいどの鳥
			外記座へ下り、ス米仙入、ニノ切、三ノ切 よし、その後肥前座へ半途から出て 江戸紫、ニノ切、四ノ中勤む

布太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上	
------	----	---	--

サ叔太夫 (竹本)

七六六	上上	取まほしのよいは政和通室
-----	----	--------------

葉太夫 (竹本)

七八一九		上	
------	--	---	--

初太夫 (陸竹)

七四七三	陸竹	上	此人と小末上るりといふ心は いみじめるとあまい所が有る	坂田文重郎に同じ
七四七〇		上上		

浜太夫 (豊竹)

七六五	江戸	上	のびやかに見渡す様也唐州米
-----	----	---	---------------

橋磨太夫 (竹本)

七四六	七太夫	上上高	抱ての顔が両方に有る ひよくの鳥	名古屋にて高名 去々年肥前座へ半途に下り、江戸紫 ニノ切大者り 「大助」の三、「道成寺」の出語りよし 操の氣、世話事、本ぐり、上るりの こなし能けれど、野卑なるがキズ 上品ならは若松座にて読く者なし
七六一	上佐		らやりとては外に語 りては中橋	
七八一三				

延享年中、外記座と七太夫興行の時、初下り
「江戸紫」の四ノ手馬籠を語る
以来江戸に留り、大内鑑の四段目大出末
肥前座では「菅原」四、十本、三、四并々
一七六五年(明和二)四月二十一日段
大倉龍院、若千町居士、浅草東岳寺に墓
「鶯宿梅」出版元中山清七はその弟子

七五八		上品ノ上	浄まりの仕出しみくうはふい 小原御幸	十五年前の辰の冬、豊竹座初出座 申年より竹本座、京、大坂と勤 らる 声美しいが、此の一兩年は少し冷み の株
七六一		次上上當	花やかに諸人と引立る茶箱	
七六二		次上上當	肌きれいな鳥賊にもはるめく木 目あへ	
七六三	江戸	次上上吉	ゆつたりとして立用る藤の花化	最近目もうとく耳も遠い、いなり 天神のけ持ち
七六四	京都		格別にうつくしいるりの玉	去々年新地顔見せ、妹背山、いな りの花景園、道行の評あり
七六五			いやは最上とあそく美濃米	
七六六			しこくうつくしいの吉昌けんぼう	
七八一九		巻軸 切上上吉	いっさいてもほんまりとした關 看待	

彦太夫 (陸奥)

八〇六	一七七八年 (安永七) 九月引退		大和孫弟子にて評判よし美音也 名高き語りもの
	一七八四年 (天明四) 三月十九日歿 (一邦)		
		あいご 道行 蛭ヶ小嶋 小島 菊水 卷 三 花系 同 道行	道 行 道行 勘 吉 日高川 三 道行 安達ヶ原 三 妹背山 三 四切道行

七四六	七太夫	上上吉	うきへ上る事は雲迄もくの ないまほり	十三年前の魚に辰松へ下り金巻冊 以来好評 声はよいが、地にうまみなく、文句固へ かねてうつとしく、老若男女の詞がごん つらやになる 彦平つ、じ、四、彦原、四よし 此度「夏祭」道具屋の段と勤む
-----	-----	-----	-----------------------	---

考太夫 (大和)

七五九
大音にて四段目語の上手なれど識可くなし 測へば看板斗と見て徒らに作の評判をする が如し

考太夫 (竹本)

一七六六年(明和三)十月初出座(一印)
七六六
堀江 市の側
上 上
精出してかたり落へ聖宋けんほう

久太夫 (竹本)

七六六
京都
上 上
小し付にほねを折貞観永ほう

久太夫 (豊竹)

七八三
肥前
上 上

肥前掾 (豊竹)

一七二六年(享保十)二月 豊竹新太夫トシテ初出座 一七三四年(同十九)江戸へ下リ 元文ノ始メ肥前掾ニシテ印
七四六
辰松
上 上 吉
今歳から二度のふつとめ(うまい) ふしつらき川邊に身をしづめ 落ふ鴉の鳥
東の座初出勤は、身替る時月、 「秀里」の頃より人気出る。 「全盛冊」の年の盆より外記座へ下る。 初下りは「合戦梅」方七病気の段 翌年の「富士日記」以来世話場を主と して語る。 此度の「石橋山」三段目大あり 昔の様に律氣に語ればよいが、今は こくちん過て我終ぶしく、入れ事も あり。 大入りの日は氣を入れて語り、不入り の時は代役をとる。
七六一
江戸
上 上 吉
後には蓬菜にのり給ふ錢巻橋 味いもサしつわら仕合よしの高溜り
七六二

七六三	江戸	不出	其土地にはびこる鳳凰草の花
七六四	〃	〃	みいらのよい千手相の玉
七六五	〃	〃	
七六六	〃	〃	
七八一三			

若年より越前掾に随従し、やがて新大夫と号す
享保末年江戸に下り、肥前という座元の名目
を承めて芝居興行し、肥前掾を名乗る。
改良したる事① 延享迄の人形招きの看板と虫
看板にかえる、これは江戸風には背うし事②
夜中木戸前に明日札をあんどうにてかけ始める
延享四年春、菅原に大入り大当り、神田町御屋
町へ家を建ててから、すばはら長屋と言はれる
宝丁十一年、伊勢が太夫へ名目を譲り、自らは隠居
して宮内と改めらるが、伊勢が太夫病身のちめ、名目
を許して帰政、そこで宮内を再び肥前としら所病
死す

比奈太夫 (竹本)

七六三	京都	上止	源氏物語にもれぬ夕顔のサ化
-----	----	----	---------------

兵庫太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上止	
------	----	----	--

籍太夫 (豊竹)

一七五五年 (宝丁五)	十一月出座 (邦)		
七五六	豊竹	若術	
七五七	〃	上上士	員頭員のほりは段々に増し てくる大雪山

廣太夫 (豊竹)

七八一三	肥前	上	
------	----	---	--

富士太夫 (竹本)

七六六	江戸	上止	わほりのつよい祥符通宝
-----	----	----	-------------

豊前掾 (扇谷)

七六五	四奈南		歌舞伎出勤
-----	-----	--	-------

筆太夫 (竹本)

七六六	京都	上上	しん人ひいきに思ふ皇宗通室
七七七	外記	上上吉	しろうきをみればうひしい手取り
七八一三	肥前	大上上吉	答は四方にいはるそのいさおし は大好庵
七八一九 八〇六		上上吉	〔豊竹筆太夫〕 初下り以来何と語っても面白し 眞の義太夫節ではないとの噂あり 城木屋「かたね」比翼隊、花川戸 大出来、当春「むかし唄」九の評あり 小音なり 岩所町の油屋作介 城木屋は一昨年から去年迄二年越 しのちりところ

曲屋佐助と云
江戸にて評判宜く
妹背山 酒屋 城木屋 糸桜
比翼隊 花川戸 一平 代曾我

林鹿太夫 (豊竹)

一七五七年	(宝丁七)	十二月初出座 (一邦)	
七五八		中品ノ中	馴染みはなけれど、うきよう肌 なと誰も夕顔
七六一		上上	たへず締ひいきに預り手形箱
七六二		上上吉	段々料理に遣ふ捌きいとつから し酢
七六三		上上吉	日の出とほめらる、朝顔の花
七六四		上上吉	細工に用ひて上なし目のふの玉
七六五		上上吉	段々と出せあらんうぞ日出米
七六六	江戸	上上吉	かすく、そろへてたつとし嘉 定通室
七八一九		上上吉	けつかい、うな声はどこ迄も融大 臣

声大きく、敵形から女形迄夫々に
わかる、しかし糸をつむぐ様な声
語り出しは低く、後へ行く程大きくな
る

八〇六

好評の「巖柳」「出口」以来当りなし
此度の「白石」「千本」三「景清」の評あり

大坂にて評判よし立物にて名高し別て生涯評判うけたる浄るり戯題

三代記 セツ目 花 ワタ 祥 ヨシ
太功記 ナツ目 蝶 ハ 花 ハ 形 ハ
出 コ ロ 目 木 キ 下 シ 蔭 カ

文太夫 (竹本)

七二七

ふしみや五兵衛という商売屋
竹本座 ↓ 豊竹座 ↓ 竹本座
浄るりおとなしく、節こまかに、詰修羅巧者
杉山勘左五門に同じ、浄るりの一件を崩さず、
本間に語る故、ちり目すくなし、
声量不足

文太夫 (竹本)

七六三

手打に上手の入るそばの花

七六四

外記

上上垂

取りつくろわすきれいにしら玉

七六五

上上士

色で丸めたるやうに肉へる嶋原木

七六六

堀江
市の側

ッ

大きにやはらいたり大和通室

卷太夫 (竹本)

七七七	外記	上上	判	巻のはにきりまのぼる評	「おんな陣取」三ノ口好評
-----	----	----	---	-------------	--------------

政太夫 (竹本)

七二七	若竹政太夫	一七一二年 (正徳二)	竹本政太夫トシテ出座	中しみや長四郎 豊竹座京都興行の時、若太夫方にて勤める 大坂に下り曾根崎の芝居にて若竹政太夫と改名 兩年勤め、三年目に出雲方へ出座 廿伎野八重桐に同じ、小兵なれど取廻り、しく 修羅つめなど、かゆい所へ手の届く如し、別して 段切と大事にす 音声はホカ
(竹本播方掾ニツツク) 一七三四年 (享保十九) 二月竹本義太夫 翌年十一月竹本上笠方掾 一七三七(元文 二)一月竹本播方方掾ニナル(一邦)				

政太夫 (竹本)

一七四三年 (寛保三)	十月初出座 (一邦)	此人と兵庫渡海といふ 心は播方造は行かぬ 師匠の名まで楊葉の 朝舞扇子 此は鯉のさし味 あらはいより名がよみ 節は肴のはてそふな なせうつりが残ってねる	ざん場にて十兵正といふ、小政といふ異名 故播方に生写しのため政太夫となる もらくくとねばつく浄まりなれど、芝居 ニ、話など位事は好評 此一場童兵正といふ真屋 播方方掾門弟 芝居出勤時より声大うくなり、風も かわり巧者なれどサレ癖あり 浄まりと十人分に練るため、人形三味線の 間も折にははづれ易し 若井半四郎に同じ 当世芝居にて面白く、やつし、世話事 の名人
一七四七二	上上吉		
七四三三			
七四四〇			

七五六 竹本

七五七 名大上上吉

七五八 左座 上品ノ大上上

成功甚深球磨無類

播戸殿面影に少しも度らぬ浄瑠璃の響き屋上の鐘

百代迄も西の座の大立物只よい〜と持て糺す程々舞

歌仙才三文屋康木の歌の意に同じ、浄瑠璃は切者にして其体俗に近し譬は商人の能衣者たるが如し

初床の「真鳥」より一度も悪い事なく、又文正公翁先生にももがしがある「姫小松」の評あり

播戸様門弟で雑魚場重兵卫

寛保三年、三度目の「真鳥」に竹本座

初床

次の替り、「兎原氏」大当り、その後

菅原、二、「千本桜」狐、「布引」三、「道風

三、大当り

去る子年の秋、京都の座へ帰越有つても好評にて、丑年の「姫小松」三、「話」春日小町、三四、

話大出来

播戸様の音声節付共に直写して語られ、其上へ

を付て甚と大事にかけらる、

須戸明石の風景の様、心は、名にしておろ所なれと

播戸の中程行き届かぬ

七五九

七六一

七六二

七六三

七六四

七六五

七六六

八〇六

外記

極上上吉

位事にかけては誰か向ても千両箱

ひほとしのよろみすがたい、い、い、

よき、海老の台引

富貴のかららとほめる牡丹の花

自由自在に妙を得し満千の玉

お小助をたがへず通す播戸米

サコバ十兵衛 西口とも云う

明和三年七月十日、五十六才にて歿 声譽雲外巨乾居士

此人始より播磨の名をうけ三ノ切語り 生涯評判よきもの

- 菅原 三ノ切
- 双蝶々 八ノ目
- 道風 三ノ切
- 菊水巻 三ノ切
- 千本桜 三ノ切
- 布引 三ノ切
- 姫小松 三ノ切
- 安達 四ノ切
- 中臣蔵 四段目
- 恋女房 十段目
- 日高川 三ノ切
- 蘭肴待 三ノ切

浄るりよく語りても前の政大夫と一口には言はれず、いはば田舎から来た養子の身代をよくかたむるが如し

政太夫 (竹本)

七八一九	上上吉	新しい事は何処へ往ても三日太平記	小音になつたが、うま味が出来る。西口の弟子が岸もとやの弟子が分らぬ。去秋より京都出勤。紙治(安永七、四、北新地)、亀山新(同年七)、曾根崎村(下の巻(同年九))以降休み。その後「盛衰記」四、紙治、「信仰記」三、見原氏、「元神天皇」を勤める。
八〇六			塩町はりまや理兵エト云う前名 中太夫 二代政太夫弟子にて明和申より文化年中の間三ノ切斗語られ立物上手なり。三ノ津評判よし。播磨二代目政太夫場の三ノ切のみ語られ中にも生涯評判よきもの。
一八一一年 (文化八) 七月十四日、八十才で歿 (一邦)			太功記 本 亀山新 在所 紙 治 比良藏 三ノ切 考 山毛谷村

増太夫 (竹本)

七四六	七太夫	上上	さうとてはうつくしい声のうづら	去秋辰松へ下り、西行レニノ口好評。又、より外記へスケに出、真意レ四ノ切を勤める。当春いなりで「武烈」ニノ中、道行のツレ、六、真を勤める。声あり達者なり。
-----	-----	----	-----------------	--

増太夫 (扇谷)

七六五	四条南		歌舞伎出勤	
-----	-----	--	-------	--

榊太夫 (陸竹)

七四七三	上上	未だ評判知れず	
七四七〇	上上+	声は太めしくらい、とははりまくさい、節は茶の下座、なぜおりが残る様なる	
七六一	肥前 上上吉	誰が言いても道筋わかる新大橋	

町太夫 (竹本)

七六六	江戸	上	段々出世有べし宣和けんほう
-----	----	---	---------------

町太夫 (豊竹)

七七七	肥前	上上座	初下り蕪当地にながくもがなと 当春初下り 氏太夫と真似るよう
-----	----	-----	--------------------------------------

町太夫 (豊竹)

七八三	外記	上	
-----	----	---	--

的太夫 (北本)

七六四	北本	上上	色々の役に立ものなまり玉
-----	----	----	--------------

万太夫 (竹本)

七六六		上上	いつてもこへのかゝる元符通宝
-----	--	----	----------------

万太夫 (豊竹)

七六四		上上	遣いでのあるいと玉
-----	--	----	-----------

三木太夫 (豊竹)

七六一	外記	上	豊竹本と一所にならぶ扇橋
七六二	江戸	。	舟路と追風てまづろは早く車切

岬太夫 (竹本)

一七五九年 (宝久)	九月初出座 (邦)		
七六一	上上	色々と節に心と懸物箱	
(竹本咲太夫ニツヅク)			

美知太夫 (陸竹)

七四七三	陸竹	上上	此人と天王寺からうつす相庭といふ、心は平野へ取るはさて	道六とて平野の道具商、杉山藤五郎と同じく、柄はよいが、読みがこまぬ
七四七〇	上上	声は二百二十屋、とは平野の通節は呑んで花見、なせしやらなふて京がよい		

道太夫 (陸奥)

七四六	辰松	上上	能ならふ、と肉く人がいふづけ鳥	前名喜之助、石橋山、序切連者
-----	----	----	-----------------	----------------

道太夫 (竹本)

七六一	土佐	上	豊竹本と一所にならぶ扇橋
七六五	江戸	上上	声かゝる様にとひいきを松代米

光太夫 (豊竹)

七六三	江戸	上上	とり廻しやぼで	(ムシ) 花
七六五	江戸	上上	手取り物と肉ゆる伊勢崎米	

美名太夫 (豊竹)

七六一	肥前	上上	初ゆかから三段目話を取こへ橋
七六三	江戸	上上	人肉てのくどならして引つわの花

湊太夫 (竹本)

七六一	土佐	上上	声がかゝるにぎやかな日本橋
-----	----	----	---------------

湊太夫 (北本)

七六四	北本	上上	奇妙、とほめる品玉
-----	----	----	-----------

湊太夫 (豊竹)

七八一	上		
-----	---	--	--

湊太夫 (豊竹)

八〇六			ア々なれども末世に残りたる戯題しれず
-----	--	--	--------------------

三根太夫 (竹本)

一七六三年 (宝暦十三年) 十二月初出座 (一邦)			
七六四	外記	上上	五り出して遣ふ数の玉
七六五			そ、けぬやうに思ひます阿蘇米
七六六	堀江 市中の側		めつきりと上りましち末元通室
七八一九		上上音	同じめるとしつかりとした昔八丈
八〇六			くせのない浄るり

「塩飽」三ノ中(安永、五、九、竹本)、「妹背」三、切と、「大塔宮」三ノ口(同六、四、北新地)、「安土」四ノ口(同九、一、竹本)、「時代織」(同十二、竹本)の評あり

八兵五と云う
五人切の名人なり、大坂にて評判よし

三和太夫 (豊竹)

七二七			内匠理太夫の子で勝次郎十五才の時、辰松八郎兵五同道にて和歌山へ下り浄るりと語る
			卯(一七三三年、享保八)の十一月朔日より豊竹座へ出て、三和太夫といふ
			器用にて手跡よく、三味線もよく
			ふしのうけ取、本ぐり早し
			地事景事道行はよいが、つめ詞に才難、其の嵐三五郎と対比

(豊竹上野方掾ニツヅク)

一七三四年(享保十九)十月、竹本内匠太夫、一七四一年(寛保元)九月、豊竹内匠太夫、一七四五年(延享二年)十一月、豊竹上野方掾ニナル (一邦)

三和太夫 (豊竹)

七四六	休	上上	御病氣とやらの段の評判 眼めなふくらう	辰松座、三座太夫、ミノ口大当りの後 旅へ出る。再び辰松へ出勤すればと、し る事なく、その後病氣
-----	---	----	------------------------	---

三和太夫 (豊竹)

七六三	江戸	上	せにはびこりて目出度箱の花	
-----	----	---	---------------	--

陸奥太夫 (豊竹)

七四七・二		上上	雷	堀江にて平太と言う 当世の氣に依り受けよく、声ふし共 に打ちそろう
七四七・三		上上	雷	平太という商人 昔、沢あやめと同じ、音曲もとなし う、下卑す、都合さつぱりとして せりかよし
七四七・四		上上	雷	此人の声京都内嶋といふ、心は 地がようてうつくしいほめて
七四七・五		上上	雷	声は店主あふび、とはほねぶとなか始末 節はかい帳のふだ、なせ近年のはやり物

村太夫 (竹本)

七六四	京都	上上	止	沃山にして用いるあい玉
七六五	江戸	上上	雷	此次には語結ふと皆々松本米 しぜんときより有天聖げんほう し、らり尾のながくしいが切 者殊
七六六				
七七七	外記	上上	雷	「天口」道行、千本、ミノ中好評 「ぬさな陣取」ニ、切は閉すとれず 中村屋源治郎と云う 「本町育」行徳、「天口」道行よし
八〇六				

村太夫 (豊竹)

七八一・三	肥前	上上	吉	商ひ切者になんども重宝な 十九文みせ
				高城座の「花袴」は此の人一人の 大入り大当り 当春「むかし唄」五月の評あり

文字太夫 (竹本)

七四七二	上上齋	岡からに花やかな間拍子のよい舞扇子	一七四〇年(元文五)九月 豊竹文字太夫トシテ 初出座、一七四七年(延享四)八月改姓(即)
七四七三	上上高	此人の音曲寄ふうといふ心はしつほりとして面白い	一七四〇年(元文五)八月改姓(即)
七四七〇	上上高	声はまめ中着に小玉とはらいそりてもまわい	一七四〇年(元文五)八月改姓(即)
七八一九	上上齋	節は勤者のむす子なせ江戸もどろからよい	一七四〇年(元文五)八月改姓(即)
八〇六		声はまめ中着に小玉とはらいそりてもまわい	一七四〇年(元文五)八月改姓(即)

声大きくてよく通るが、ふん過て圓い時代織、ニツ目、六ノ口、宗禪寺、屋敷の評あり
 其の名高しといへども、切込由が、其の頃名人多き故也

一七四〇年(元文五)八月改姓(即)
 一七四〇年(元文五)八月改姓(即)
 一七四〇年(元文五)八月改姓(即)
 一七四〇年(元文五)八月改姓(即)

元太夫 (豊竹)

七四六	辰松	上	お師匠ににまかちみかしとり
-----	----	---	---------------

元太夫 (豊竹)

七四六	辰松	上	お師匠ににまかちみかしとり
七四七三	上上高	どこやらに見込みのある 里法扇子	京都より下り豊竹座出勤
七四七〇	上上齋	此人の上るう勝同もめんといふ 心は器用なれど地がよわい	京都生まれ 越前風に心をよせ 豊竹座 に入る、時頼記、四段目好評 嵐小六と同じ 音曲きれいにして面白し

声は切付のせつら とほはましうかほそい
 節はやさ物のうしなせ京からのぬじや

元太夫 (竹本)

七五七	京都	上上音	のつしりとして御巧者な 所に皆目とつます朝日 山	大和掾に似た所もあれど、これはうぶから 美しい声 「夏祭」の評あり
七六二	〃	上上音	是はとほめはずくら初の花	
七六三	〃	上上音	かたう伝へによりくる珠敷の玉	
七六四	四条南	上上音	歌舞伎出勤	
七六六	京都	上上音	引くるんでようば三間音通宝	

木林太夫 (竹本)

七二七				音曲未だ実のらす
-----	--	--	--	----------

木林太夫 (竹本)

一七五六年 (室戸六)	二月初出座 (一邦)		
七五六	竹本		対揚

綾太夫 (竹本)

一七四一年 (元文六)	一月初出座 (一邦)		
八〇六			
(竹本上総太夫ニツヅク)			
			橋麿塚弟子にて名高し 後に受領して竹本上總掾となる。 生涯名高き語りもの 薄雪 清水の段 伊呂波遊起 せの段 出入の姿 舞臺 橋供養 二ノ田 双蝶々 木屋の段 布引 二ノ田

綾太夫 (竹本)

七五六	竹本		声花秀術	師匠は上総 「姫小松」の評あり
七五七	〃	上上吉	御出世は段々に吹寄せ来る 女坂田坂の和歌の浦	上総太夫の弟子にて、師匠に負け まじき器量
七五八		上上吉	はくならうとして美しいいらつか の錦木	九年二則の冬より出勤
七六一	江戸	上上吉	諸方から引立る三味線相	
七六二	江戸	上上吉	三ツ道具揃らわいの急度 白話め	
七六六	〃	〃	座本をつとめて藝事昌する和同珍用	
八〇六				其の名高しといへどもニ、切道ゆ かず其の頃名人多き故也

綾太夫 (竹本)

七八一九		上上吉		此村屋治兵衛と云う 前名 倉太夫 取分け江戸にて評判よし
八〇六				白石新 <small>五ツ目</small> 伊達鏡 <small>とうみや</small> <small>七ツ目</small> 上はし 花上野 <small>呂川</small> 紙 治

綾太夫 (豊竹)

七八一三	外記	巻軸 切上上吉	御巧者なまよみほごっしりと した駿河町の越後屋	一七七五年(安永四)秋名古屋若宮八幡 社内にて七月朝日より「妹背山」因太夫 と三ツ切かけ合、ニ、切、九月より「飯の紅葉 縁切」ともに大立ち、 一七七八年(同八)江戸初下り、菅原三、 切大立ち、其の後「伊賀越」翌年の「伊達 競」も好評 外記座新太夫の後見
------	----	------------	----------------------------	---

八重太夫 (豊竹)

一七六二年(宝暦十二)四月豊竹八重太夫トシテ出座	一七六五年(明和三)ニセ八重太夫ニナル	(一邦)
七六五	上	下小しとこぬらが尼が嶋米
七六六	江戸 上 上	あいやうは一ぶくのとく天福鎮ほう
七八一九	上 上 吉	口中はさてもよふ廻る東海道
七八二		いづ平、江戸下り以来好評、京都でも、おどけ曾我、新口、大当り、「融大臣」三ッ切(女永六、八、北原江)、此度の「白石」十一冊目の評あり、ウレイ場は口に合ぬが、千ヤリにかけまはさつ、いもの
八〇六		三年以前、江戸の「新口」は大当り、去秋より外記座へ下る、一七八二年(天明二)一月「鏡山」九ツ目を語り、「近江原氏」九ツ目が目見得、一七七六年(安永五、四、北原江)、「三國寺」双奴請状、四ッ大当り、伊豆平と云う、堀川は名人なり、三ヶ津にて評判よし
一七九四年(寛政六)十月歿	(一邦)	

八尾太夫 (竹本)

七六五	京都	上 上 止	岡マ、うかる、ふしは小室米
七六六	上 上 上	ます、く、ほめます、紹定通室	

八義太夫 (豊竹)

七六二	江戸	上 上 吉	江戸へは出世の齣八情一はい筒ぶり
七六三	上 上 上	こまかにしとらしいは南天のサ花	(竹本八義太夫)

八十太夫 (竹本)

七六四	土佐	上	
-----	----	---	--

彌太夫 (他國)

七四七〇	上 上	声はなら茶くらべ、河内からの出じや、節はやとみ鏡土、どこやらそつづく
------	-----	------------------------------------

彌太夫 (陸竹)

七四七二	陸竹	上	未だのもし御巧者 連付左扇子	故錦太夫門人 おどけたる所、さほぢたる所などおかし く、面白き節などよく付けらるゝ、 初子はよいがらしイ事は少し申分あり、 國太夫、文跡など多からぬ様に頼ます
------	----	---	-------------------	---

彌太夫 (竹本)

(竹本磯太夫カラカ)				
七八一九	上上書	語りやうは突出し 兵庫岬	声は丈夫 北の昔ハ文、白木屋、女土、序切の 評あり	

彌太夫 (竹本)

八〇六				紙屋儀右正門と云う 鎌倉山、四ツ目の評判よし
-----	--	--	--	---------------------------

大和太夫 (竹本)

七二七	竹本			和州田原本の人 天神記、天拜山が初床で好評 おとし一流かはり、思入れにあてん 事と才とする故、見物受けよし 嵐三右正門と同じ 世話事よし、時々こんきようなる 声が出るが、声大ににして語出し派 手なり
八〇六				前名考太夫 播磨掾におとらぬ名人以て始終 四、切語りなり 生涯評判よろしうもの

日本垢袖 四切 寿門松 新
宿 庚申在所 川中島 四切
眞 鳥 四切 鬼 一四切
藤 原 四切 京土産 兜軍記 書

一七三三年 (享保十八) 三月十二日歿

(豊竹上野少掾カラ) 一七五一(宝元) 再受領(一邦)

七五六	竹本	至功美震音即無双	歌仙才五小野小町の歌の意に同じ古への竹本頼母の風也。音声艶麗して気力なし喻へていはゞ能女の惱める所有に似たり
七五七	〃	實大上上吉	日本惣巻軸 浄るりの行儀とくづさず、古風に語る故語り口は淋しうて退屈する
七五八	〃	極上品上上	始め東の座にて三輪大夫、それより出羽の芝居で伊藤と名乗り、其後西へ住んで竹本内匠大夫、再び東へ帰って豊竹内匠より上野掾と成る、それより京都へ行て竹茂都大隅、去る辰の年、再び竹本座へ帰り、「大内鑑」手引れ、「恋女房」重の井愁ひ、「愛護若」盛衰記、鐘の場大当り

七五九	〃	至大上上吉	評判に及ばぬ物せかいの伽羅箱	栗嶋系因は不評(二十日程で打上げ)父は内匠理大夫で、越前掾の門
七六一	〃	至大上上吉	評判に及ばぬ物せかいの伽羅箱	浄瑠璃の格式正しく行義乱れず、筑後越前の遺風を守り
七六二	〃	至極上上吉	小石、みにすると海鼠は上なし極っていり酒	声柄は美しいが、生得微力なる声故か、序破急の介ら立ち難き故に、詰合、段切の場に至っては、かゆき所へ手の届かぬ様な場も折に触れては有り
七六三	〃	〃	うつつくしく咲かる源平の梅の花	十種香の会の様、心は、花車(キヤンヤ)で奇麗に優しき遊ばなれど下々へは向きにくい耐(みぢ)や

七六五 江戸
 七六六 京都
 八〇六

世間で随一としてはやす尾張米
 五ふんかねをなへらる五行のいふ

始め三輪太夫、内匠太夫、大隅太夫
 豊竹座を勤め、又竹本座に戻り播磨跡院
 となる

節語りの名人なり
 評判よき浄るり

ひらかな 鐘場 舞 雪 心
 双蝶々 ほと 恋女房 十日
 役行者 三、切 蛭子小嶋 三、切
 安 達 三、切 あいご 中、切 鐘場

一七六六年（明和三）十一月八日没（一邦）

由良太夫（豊竹）

七八三 肥前 上

白合太夫（竹本）

一七四一年（元文六）一月初出座（一邦）

七四七二

上上音

美しさは粹らしい加賀扇子

此太夫門弟
 拍子よし

七四七三

上上音

此人の声をほし月夜といふ心
 は上げ賑はしい

丹州生れ
 健気な音曲にして、あまり、とん
 だふしと語らず

三保木七太郎に同じく切者なれど
 当りはなし

七四八〇

声は生鏝同せん、こは大きくても高がせぬ
 節は進上に一舟樽、なせどふでも徳利がない

七五八	中品ノ上上	語り方の丈夫さ、つても強 いろ八幡	十八年前竹本座初出座。以来七年 同勤める。 辰の冬より豊竹座と暫く勤め、それ より江戸、京へ 去る丑の冬より竹本座へ帰り新参
七六一	上上吉	老木でも語りからは数年の香箱	其名高しといへども、テ、切 逆ゆかす、其の頃名人多き 故也
七六二	〃	老切は端と一所にあたり、よる湯とうか	
八〇六			

百合太夫 (竹本)

七七七	外記	上上吉	うつくしい声ばかりよりてなとか	畠田屋庄次といひ 声が良く、突込んで語るが、同じ節 ばかり語るより 近頃は評判がサシ減入る
七八三	〃	上上士	うつくしい声はやま〜ある	初下りの、妹背山、四は大方り 外記座の頭取
八〇六				鬼と云う 昔八丈、鈴ヶ森、評判よし

芳太夫 (竹本)

七八一九		上		
------	--	---	--	--

速太夫 (竹本)

七六三	上上	手入なしに見事なぼけの花
七六四	上上吉	愛有てにぎやかな手玉

淀太夫 (豊竹)

七六六	豊竹		
-----	----	--	--

頼太夫 (豊竹)

七六一	肥前	上	豊竹本と一所にならふ扇橋
七六二	江戸	上く	すきさらいの有ってうまい鮫汁
七六四	土佐	上	
七六五		上止	うるほ水とちへて丸毫米
七八一九		上上膏	おっと専のぬるろしい皿屋敷
八〇六			

〔竹本頼太夫〕

此度「白石」五ツ目、七ツ目掛合、ハノロの評あり、女形の口跡いやらし、米屋利右エ門といふ「白石新」逆井村評判よし

カ太夫 (尾張)

七四七〇			声は手とちかく、かくが(ご)ぶらぬ節はよくあたますれてひかる
------	--	--	--------------------------------

理喜太夫 (豊竹)

七六一	肥前	上	豊竹本と一所にならふ扇橋
七六二	江戸	上く	
七六三		上止	
七六四	肥前	上止	すきさらいの有ってうまい鮫汁

(ハニ)の花

律太夫 (豊竹)

七六六	豊竹		
-----	----	--	--

律太夫 (竹本)

七八一九		上	
------	--	---	--

律實太夫 (豊竹)

七六六	豊竹		
-----	----	--	--

若狭太夫 (豊竹)

七四六	辰松	上上音	功者なれ共どこやら淋しいかんこ鳥
			大坂で絹太夫といつて稽古屋で名高き人 去る頃、肥前座へ下り、内匠のせうふうし で、久米仙人、ミノ中を語る。 芸ほうまいが評判がたつず 当春、石橋山、ミノ中、はよ下り以来の評判 地過ぎて味そごい

若太夫 (豊竹)

七四六	若松	巻軸 上上音	ふ年寄つてもお名はくら せぬきくけい鳥
			堺鳩太夫とて東門弟 若い時から芸大ぶっほいに取じめはなけ れど、声柄大音にてこの音よし 当春、久々出座の「夏祭」評あり

若太夫 (豊竹)

七五六	豊竹		優艶妙絶音声無類
七五七		大上上音	結構な御声は汲めども 尽さぬ湧き出づる水鏡
七五八		中夾 上上音	評判は日本一の名物せ上 に響き、渡る富士太鼓
			歌仙才一僧正遍照の歌の意に同じ浄る りの様は得られ共、其言葉花にして美少 し、譬言へば因に画る女と見て徒に情を動 かすか如し 四段目の誌は天下才一 前九年の評あり 元文四年、竹本座、盛衰記しが初床 「菅原」四段目は太夫中才一の有り

七六一	大上上吉	当年曾根崎に当りのつよい矢箱
七六二	亟上上吉	高銀にえる蛇の福々小くらいる

豊竹座にては、橋供養、四段目廷ラの場合は
下地よく声の色と匂ひが有り、いかしくは
悲嘆にうま味。後三年と勤功記、
四段目の濡れ場は美うて、どうも
まらず
声はせ上に又と一人並ぶ人は有まじ、此の
そのけては人々のせに四段目の切と賑かに面
白う語る人は向及はず、しかし芸に実の入
ぬ様に因ゆる時もあり、一回の切は見物の
氣に因き退屈の出る折なれば、声花やか
なる語り言に有ぐれば見物の精をつかす
物也
今度、信長記、三の語は天晴れ御手柄
花見小袖の様、心は、模様は浪手で美し
けれど、中入の真綿が暮らうに見ゆる

七六三	極上上吉	呂敷多くてよいさくら花
七六四	々	何方より向ても面向不背の玉

（竹本島大夫ニツヅク）

若 大 夫 （豊竹）

八〇六			

森川屋庄藏と云う
前名 和佐大夫 島大夫
其名江戸にて高し
評判よきもの
先代サ秋 藤原 新八百屋
小田 館 五日 三勝 書置

若太夫 (竹本)

八〇六

アタなれど末世に残りたる戯題しれず

和歌太夫 (扇谷)

七六五

四条南

歌伎出勤

和佐太夫 (竹本)

七六五

京都

上上

一とくるめに取かこくら大垣米

和佐太夫 (豊竹)

七六六

豊竹

就太夫 (竹本)

七六三

江戸

上上

氣に柏子の有るちんほほの花

枚数	項目	誤	正	備考
七枚	伊勢大夫(豊竹)		七六六 豊竹	最後尾ニ追加
一〇裏	今太夫(竹本)		上ノ	七六四ノ才ニ段ニ追加
一一表	氏太夫(豊竹)	上上士	上上吉	七七七ノ項ヲ訂正
二四裏	越太夫(竹本)	八・六	八〇六	
二八裏	駒太夫(豊竹)		八〇六	「八幡すしと云う觀の語りものなり」ノ項ノ才一段ニ追加
三七裏			新大夫(豊竹)	七七七ト七八一、三ノニツノ所原大夫名
六一裏	笹太夫(豊竹)	上上吉	上上吉	七六四ノ才ニ段訂正
六七裏	老太夫(豊竹)		江戸	七六五ノ才ニ段ニ追加
七〇表	文字太夫(竹本)	上上吉	上上吉	七四七・〇ノ才ニ段訂正

(三味線の部)

七裏	木曾八(竹本)	七五六	七六五	
二八裏	幸三郎(竹本)	〃	(ナシ)	七六六ノ才ニ段削除